

今を造るもの

青春の思い出は、ほろ苦い

勉強は難しかった、テストに追いかけられた：

それでも、懸命に部活に取り組んだ

師とふれあい、友と語り合った

そして、恋もした：

あの時のあの場所が、

確かに、今の私を形造っている

私たちの生きた時代……………32頁

恩師からのメッセージ……………33～41頁

【同窓生エッセイ】

私たちのあのころ・このころ……………42～52頁



第53回全国高校野球選手権大会岐阜県予選

於 岐阜球場 1971

後藤寿彦(昭47卒)氏提供

私たちの生きた時代（昭和28年～平成23年）

昭和28年

▶ 創立80周年記念祝典



創立80周年記念品

昭和29年

▶ 夏の全国野球選手権大会出場

昭和31年

▶ 日本が国際連盟に加盟

昭和34年

▶ 伊勢湾台風

昭和39年

▶ 東京オリンピック開催

昭和41年

▶ 創立90周年祝賀式典



旧校舎

昭和43年

▶ 林間学舎（山の家）竣工式



山の家

昭和44年

▶ 東京府中で3億円強奪事件

▶ 東大入試中止

昭和45年

▶ 米アポロ11号人類初の月着陸

昭和45年

▶ 日航“よど号”ハイジャック事件

昭和46年

▶ 日本万国博開催 ▶ 三島事件

▶ ニクソン米大統領がドル防衛などの経済政策を発表

▶ 大久保清事件



運動会

昭和47年

▶ 連合赤軍事件、浅間山荘で銃撃戦

昭和48年

▶ 札幌冬季オリンピック開催

▶ 創立100周年記念祭



岐高100年祭

昭和49年

▶ 金大中氏誘かい事件

▶ トイレトペーパー、洗剤などの買いだめ騒動

昭和51年

▶ ルパン島で小野田小尉を救出

昭和52年

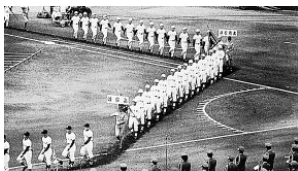
▶ 台風17号が猛威、長良川決壊

昭和53年

▶ 日本赤軍による日航ハイジャック事件

▶ 植村直己北極点単独行

▶ 本四架橋「大三島橋」開通



十六年ぶりの選抜大会

昭和54年

▶ 英国総選挙でサッチャー女史首相

昭和55年

▶ 巨人軍長島監督辞任、王引退

▶ ソ連のアフガン侵入に抗議し

モスクワ五輪をボイコット



弁論大会

昭和56年

▶ 五六豪雪

▶ スペースシャトル打ち上げ成功



浄化槽が設置されたプール

昭和57年

▶ 日航機羽田沖墜落事故

▶ フォークランド紛争勃発



創立110周年記念

昭和58年

▶ 東京ディズニーランドが開園

昭和59年

▶ 第23回ロサンゼルス・オリンピック大会開催

昭和60年

▶ 日本航空ジャンボ機が群馬県山中に墜落

昭和61年

▶ 伊豆大島三原山で溶岩流出をとまなう大噴火発生

昭和63年

▶ 第24回ソウル・オリンピック大会開催

平成元年

▶ 中国・天安門事件

▶ 「ベルリンの壁」崩壊



林間学舎

平成2年

▶ 大阪で「花の万博」開催

▶ 東西ドイツ、

45年ぶりに統一



体育大会

平成3年

▶ 湾岸戦争に突入

▶ 雲仙・普賢岳で火砕流

平成4年

▶ 第25回バルセロナ・オリンピック開催

平成5年

▶ 日本人宇宙飛行士・毛利さん、宇宙へ

▶ 創立120周年記念式

▶ Jリーグ開幕

平成7年

▶ 阪神淡路大震災発生

平成12年

▶ シドニー五輪、高橋尚子、

田村亮子両選手が金メダル獲得

平成23年

▶ 新校舎完成

▶ 東日本大震災発生



新校舎

山田顕義伯と長良川

伊藤 秀幸
(昭和33年～昭和48年)



「かざおり多ぼしこしみのつけて

きよきこころのながらがわ

ながれつきせぬ

いくちよかけて きみにささげん

あゆのうお ふなばたたたいて

ほ ほ ほ

これは、明治23年明治天皇の鶴飼見物のときに供奉した山田顕義伯が作った小唄であり、芸妓の舞もつき、お座敷で唄い踊られたとか。

この山田顕義伯とは、吉田松陰の松下村塾生の一人山田市之充である。写真では見劣りする小男だが、禁門の変などにも参戦し、函館五稜郭では、天才的戦術家として西郷隆盛をも驚かせたという。然し、その真骨頂はこれではない。岩倉具視の米欧視察団に理事官として同行し、日本の近代化に最も必要なことは、法を整備することであると痛感。フランスの近代法学に傾倒して「ナポレオン法典」の編纂に生涯を捧げ、「法典伯」と呼ばれたのである。明治18年には初代司法大臣として

入閣。刑法、刑事訴訟法、民事訴訟法

を完成させたが、イギリス法学派等の

反抗を受け、明治26年に大臣を辞任。

その年の11月、生野銀山視察の折り坑

内で急死した。この49才での死を惜し

み、前出の「かざおり多ぼし」の遺墨

を石に彫った碑が、名士や九世團十郎

などの芸能人、芸妓達が協賛して建て

られて、今も東京都葛飾区の薬王院浄

光寺（通称木下薬師）の境内にある。

ところで、昭和41年だったと思う

が、修学旅行で萩へ行き松下村塾の建

物を見ていると、急に後ろから「先

生、吉田松陰はこんなところで何を教

えていたの」と一人の生徒に声をかけ

られ、一瞬ドキッとした。丁度、自分

もそう思っていたので。日本国存亡の

危機に際し議論し奔走する師弟に、14

才で入塾した市之充は僅か10ヶ月余り

であるが、その薫陶を受け、山田顕義

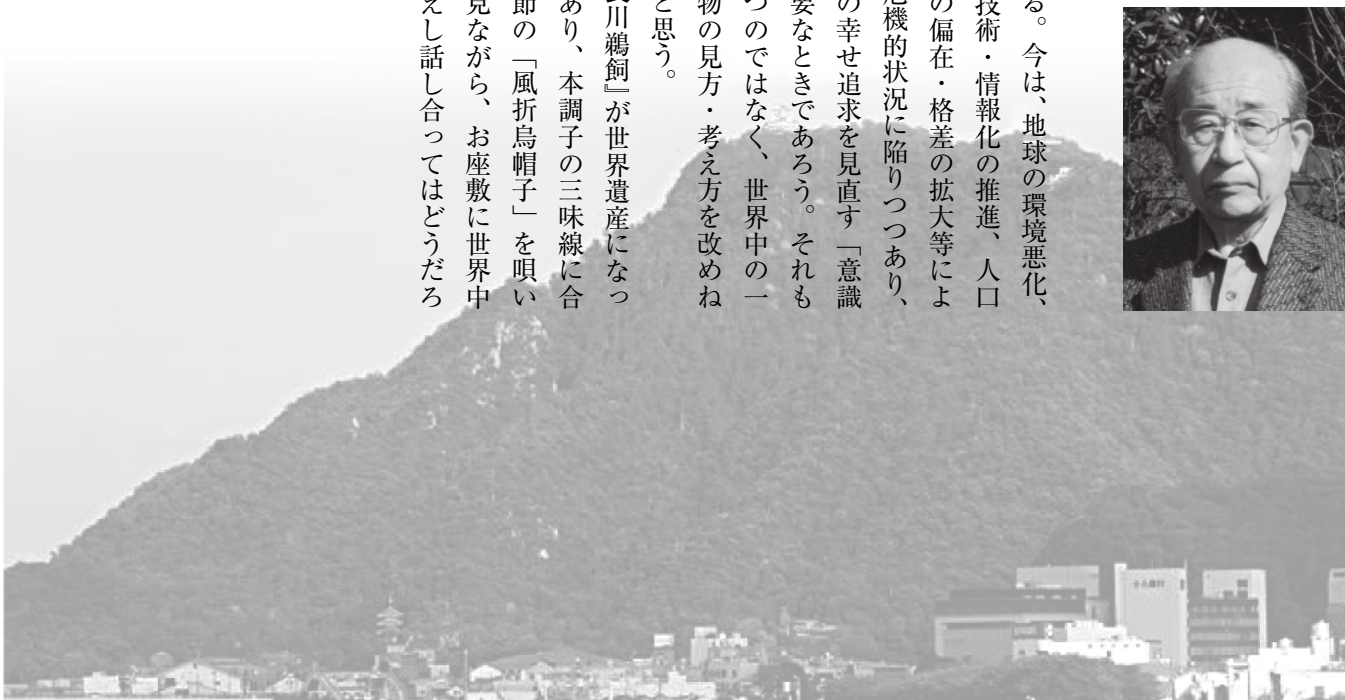
伯として司法界の優秀な人材確保を図

るため、日本法律学校（現 日本大学）

と國學院（現 國學院大學）の二校を

創設している。今は、地球の環境悪化、急激な科学技術・情報化の推進、人口の増加、富の偏在・格差の拡大等により、人類が危機的状況に陥りつつあり、経済一辺倒の幸せ追求を見直す「意識革命」が必要なときであろう。それも救世主を待つのではなく、世界中の一人ひとりが物の見方・考え方を改めねばならないと思う。

幸い『長良川鶴飼』が世界遺産になったことでもあり、本調子の三味線に合わせて一中節の「風折烏帽子」を唄い芸妓の舞を見ながら、お座敷に世界中の人をお迎えし話し合ってはどうかう。



思い出あれこれ

井口日出男
(昭和43年～昭和56年)



昭和43年4月に、英語教師として岐阜高校に赴任した。岐阜高への内示を受けた時の何とも言えぬ緊張感を覚えている。前任の母校恵那高では、英語教師というよりソフトの先生と言われた時もあり、昭和40年国体にソフトボール公認審判員として大会役員を務めることになった。赴任時の校長は深井重三郎先生であり、インターハイが西宮球場であった際にお世話になったのも深井先生で、まことに不思議な縁であった。

こんな経緯をもって赴任した岐高生は、勤勉、純朴、真面目で何事にも取り組む姿は素晴らしかった。英語の「親単」、「山貞」のテストは先生のしごきによく応えてくれた。こんな教えがいのある生徒と学校生活ができ、充実した教師生活を過ごせたことは大変幸せなことであった。

赴任した年に財団法人「岐高会」が設立され、林間学舎(山の家)が奥飛騨上宝村に完成した。この年は、焼岳

登山、「キャンプファイヤー」等をし、引率教師団も創作寸劇を創り、わが班では迷(?)作「ベニスの商人」を演じた。暗闇に浮かぶ「錫杖岳」を仰ぎ、満天の星を眺め、時を忘れて楽しんだ。奥飛騨の「ロープウェイ」ができてからは、山頂の駅から西穂高山荘まで登山した。帰りの坂道を学舎まで疲れて着いた時の飲物がうまかったことは忘れられない。

昭和48年10月に創立百周年を迎えた。記念式典の為に、各種の準備委員会ができ、同窓生、教職員、生徒等が一丸となって、ユニークな式典を大成功にやっつてのけた。卒業生である熊谷守一氏の壁掛け「椿花」の記念品は、あれ以来、我が家でも応接間に飾り、毎日眺めて楽しんでいる。

昭和53年春の選抜高校野球の甲子園出場も大変嬉しいことであった。硬式野球部は過去、夏3回、春2回の出場を果たしていたが、春は十六年ぶりであった。この選抜大会は二回戦で惜敗

したが、当時の一塁手のH君が、現在NHKの解説者として毎回テレビに出ていることは、今も岐高の名を上げているので大変嬉しく、誇りでもある。また、昭和24年の夏は決勝戦で関東の湘南高校と熱戦を行い準優勝だったが、その頃、発表された全国高校野球大会歌、「栄冠は君に輝く」は自分でも何度も演奏し、毎年夏の大会で歌われるので、テレビと一緒に「雲はわき、光あふれて」と、今でも声を張り上げて歌っている。大好きな大会歌である。

好きな音楽のことでは、忘れられない思い出もある。昭和50年にクラブ活動の授業が始まったことである。私は器楽クラブを担当し、フルート、バイオリン等をブープー、ギーギーと合奏して、下手でも楽しく音を合わせた。「コンドルはとんでいく」、「恋はみずいろ」等は、今でも演奏して楽しんでいる。

十三年間の思い出は、つきないが、ずれ又。

たかが炭焼きさされど炭焼き

「鷺見さんが炭を焼く」の巻

鷺見 邦隆

(昭和50年～昭和59年)



たしか平成13年のことであったか、時ならぬ大雪が2月になって降り、自然枯で根の弱っていた竹を根こそぎ倒してしまった。処置にどの地域も困り果て、燃すか、放置するかであった。

雪で倒された竹をなんとかならないかと思っていたところ、オイル缶で竹炭が焼けることを聞き、図書館で本を借りて窯(?)を作ってみた。

5時間ほどかけた後、煙突をしめ、翌日、こわごわふたを開けて見たところ、ガサツとかさの減った灰だらけの下のように10センチほどの消し炭みないなものが残っていた。

恐る恐る出して、この地方の炭焼き名人宅を訪ね、炭の鑑定(?)をしてもらった。名人は、叩いてみたり、ちよっと齧ってみたりして、「炭になるとる」といいながら、炭であると認定してくれた。それからというものの、暇があれば竹炭関係の本を手に入れ、ドラム缶を加工して、炭窯を作った次第。この窯で最初は3分の1が灰、3分の

1がさがさの炭、奥のほうの3分の1が、まあまあ炭という状態であった。竹の入れ物をつくって「すみのはな」なんていって皆に貰ってもらい、いい気になっていた。

今は平成27年「自然塾」と称して里山保全の仲間が13人。本格的な土窯もできあがり一昨日(平成27年2月9日)第18回目の窯開きをした。上出来であった。古来の焼き方であるので、1回1回、一喜一憂。それが面白いのである。

一昨年、CBCテレビの取材を受け、夕方のイッポウという番組で紹介されたのも嬉しかった。

我々の炭焼きは、ほとんど物の再利用という考えで活動している。材料も再利用、ドラム缶も、燃料も、入れ物も人材も(定年後)……。皆がそれぞれに違った人生を歩いてきた人が退職後一堂に集まって、(ここが肝腎です。)同じ目的で、作業する。人生を語り合

てこれからの人生を、窯の赤々と燃える火を見つめながら夜を徹して語り合う。竹炭を焼くのがこんなに楽しいことかということになるのだ。

竹は今のところ、不要資材として、里山ならどこでも手に入れることができる。竹は4年程で成竹になるし、木質系天然素材である。今では毎週月曜日と木曜日、自然塾の同士が集まり、里山竹林の奥から炭を焼く白い煙をうっすらと立ち上がらせながら、時には政治談義に花を咲かせて楽しくやっている。

岐阜高校の思い出

服部 岩夫
(昭和51年～昭和61年)



岐高赴任前である。新任校での授業中、板書でミスをした時、生徒が指摘「あー先生間違えている…」と嬉しそうに(?)。そこで一言「岐高の生徒は先生がミスをして黙って自分で訂正してノートを取るよ」。すると生徒が「岐高の先生はそんなミスはしないよ…」と。

岐高での授業中「ここは大切な所、1回しか言わないからしっかりと聴くように」。すると生徒が「1回しか聴かないからしっかりと言うように」。次の赴任校で校長先生より「岐高が素晴らしいのは生徒である…」と。

確かにその通りである。学業や部活動は言うまでもなく、それと平行して自分の興味のある事にどんどん挑戦し、極めてしまう生徒も多く、学業のみならず趣味の世界も大切に同じ志をもつ仲間同士、お互いに切磋琢磨するなど有意義な高校生活を送っていた。

以前、会報にも書かせて頂いたが、硬式野球部が春の選抜大会に出場する

時、応援のために臨時吹奏楽団を結成した。2月に結成し試合終了後の4月に解散(偽装?)したが、正に集中力の賜、準備期間が短時間にも拘わらず立派に甲子園で応援をすることができた。非常に懐かしい思い出の一つである。

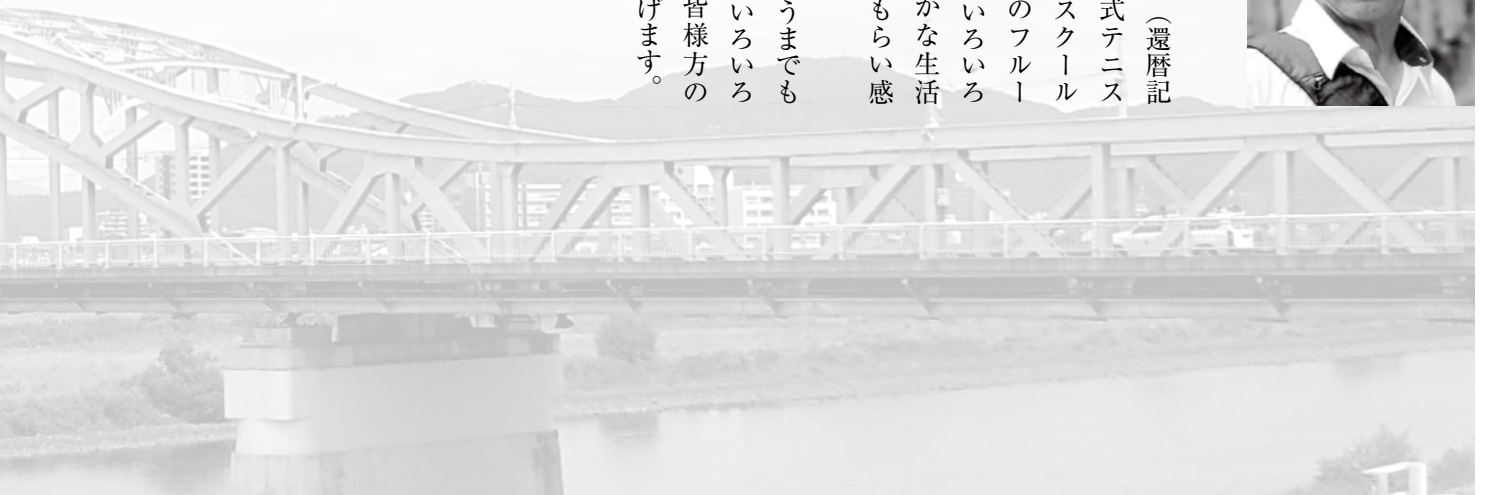
その後、野球部は夏の県大会で準優勝し甲子園の一步手前まで行った。また任意団体であった吹奏楽団は今も部活動として立派に活動している。

岐高の先生方も教科のみならず、色々な分野の専門家でありまた非常に個性的でした。私にとって職員室は教室、先生方は多種多様(生き方)の師匠として、数学は勿論、課外活動として音楽、囲碁、山歩き、スキー、硬式テニス、釣り、お酒…と、いろいろな手ほどきをして頂いた。皆さんもそれぞれの種目で先生方の顔が浮かぶと思います。

またこれらは中高年にも出来ることが多く、お陰様で今では近場を中心に

春夏秋は山歩き、冬はスキー(還暦記念にスキー道具を一新)、硬式テニス(55歳単身赴任を機にテニスクールへ入校)、そして交響楽団でのフルト演奏(45年近く)などと、いろいろな事に挑戦しています。豊かな生活(?)への切っ掛けを与えてもらい感謝しています。

岐高は、生徒の皆さんは言うまでもなく、先生方も素晴らしい。いろいろと有り難うございました。皆様方の益々のご活躍をお祈り申し上げます。



近況

私は岐阜高校に平成元年4月に転任し、8年間お世話になりました。平成4年3月の卒業生の皆さんとは1年・2年・3年と持ち上がり、3年間共に学んできました。今思い返せば、30代前半の私は精一杯やろうとがんばりすぎ、当時の生徒の皆さんに随分無理なことを課していたのではないかと思うと、赤面の至りです。しかし、1年夏の林間学舎で雨に降られたことや、2年秋の修学旅行でひと気のない大久野島の夜道を歩いたことなどが思い出され、懐かしく思います。今では岐阜高校も校舎が全面的に改築され、天井の低い「旧体」、部活動で走り回った「新体」はともに取り壊され、毎年4月初めの時間割を組んでいた時に美しい姿を見せてくれた中庭の桜の木もなくなり、とても寂しい気持ちになります。

私は現在岐山高校に勤務しており、授業では難解な大学入試問題に取り組み、放課後はバスケットボールの指導をし、昔とあまり変わりのない生活を送っています。しかし、定年まで残り1年となり体力的には少しきつくなっています。また、平成12年に伊自良にログハウスを建てて、5匹の犬たちと共に山の中の静かな暮らしを送っています。うちの犬たちには、元の飼い主に見捨てられかけて動物病院に引き取られていたものや、福島県飯舘村で生まれたが飼い主が避難生活のため飼えなくなりNPO法人を通して引き取ったものがあります。今ではすっかり我が家の暮らしに慣れ、毎日の癒やしを与えてくれています。

私たち教員にとっては、卒業生の皆さんは宝物です。高校時代に接した生徒たちが社会に出て活躍する姿を見ると、自分の仕事のやりがいを深く感じますし、今教えている生徒たちには、以前こんな生徒がいて勉強のことや部活動のことで悩み、こんな工夫をして克服したんだ、進路はこんな風に考えて大学に進んだが、現在はこんな仕事をしているんだ、といった話をしてあげられます。卒業生の皆さんはこれからも自分に自信を持って、有意義な生活を送ってもらいたいと祈っています。

辻 泰

(平成元年～平成9年)



岐阜高校の思い出

小木曾浩

(昭和63年～平成7年)



今回、岐阜高校の思い出という題にしたのは、岐阜高校とは縁が深くどの時点と限定せずに文章を書きたかったので、このような題にしました。まず、自分自身が昭和46年4月から昭和49年3月まで在学し、また教師として昭和63年4月から平成7年3月までの7年間在職しました。続いて息子が平成14年から3年間、娘が平成16年から3年間在学し、お世話になりました。この関係で、岐阜高校の思い出が自分自身の時なのか、教員時代のことなのかやや混沌としている面があるのです。

まず、教師として赴任した昭和63年には校舎が自分の高校生のことと全く変わつてなかつたことに驚きました。卒業以来約15年が過ぎていたのですが、グラウンドの砂がたまる北舎の校舎、そしてトイレは上からチェーンが下りていてそれを引いて水を流す水洗トイレなどなど一時代、いや二時代前の装置で、これら我が子の時代まで続いて妻が子供の懇談で学校を訪れた際に驚いて帰宅し、我が家では笑い話になりました。今の岐阜高校生には想像つかないと思いますが、ほんの数年前まではその状態でした。今回、原稿依頼をしてきたのは平成

4年卒の皆さんで、私は30代の青年教師でした。少子化が日本の大問題となっている今とは大違いで、団塊の世代の子供たちの世代で岐阜高校も1学年1クラスあり、私が3年生を担任した時は48人の男子クラスでした。男子クラスというのも今では過去のものになったようです。平成4年の3年生は理系は3クラスが男子クラスで男女クラスは3、文系でさえも1クラスは男子クラスでした。私は軟式野球部の顧問をしていたのですが、卒業間近になった3年生が私の所へ来て、「先生、僕は文系なのに3年間男子クラスで、女子とは会話をしたことありません」としみじみ話しました。私自身理系でしたので、3年間のうち2年間は男子クラスでした。2年生の時に男女クラスになったのですが居心地は男子クラスのほうがずっと良かった思い出があります。ただ、彼にしてみれば男女クラスでいかにも青春を謳歌している他もしれません。彼は邪念がなかったのが良かったのか、見事に東京大学へ進学しました。我が子の時代には男女クラスは過去のもので、今と同様女子のほうが元気が良かったように思います。

私の高校時代と教員時代の大きな違いは、生徒の通学区域の違いです。下宿生が学校の周りにたくさん住んでいて、学校帰りに寄り道をして彼らの大人びた生活に憧れて、私は大学では必ず親元を離れて暮らそうと考えました。私が卒業した年の高校入試から学校群制度が導入され、10年間継続されて岐阜高校の姿も変化がありました。東京で入試制度の変更があり日比谷高校が大きく姿を変えた岐阜県版だったと思います。

今回の当番学年の最年長の昭和47年卒の皆さんは、私が1年生の時の3年生で、当時生徒会長だった本田さんが丸坊主で登場し、校歌を歌う前の掛け声で「アイン、ツバイ、ドライ」と絶叫し、その姿の勇まらしさと初めて接したドイツ語は新入生にとって大変なインパクトでした。

この文章は恩師の立場で書くはずだったので、自分自身の高校時代の思い出が多くなつてしまいい大変申し訳なく思っています。岐阜高校百周年の時の3年生ということでご勘弁いただきたいと思っております。岐阜高校のさらなる発展をお祈りします。

名峰頌

「岐阜高校へ転動してもらいます」との一言。それは唐突でした。まさに青天の霹靂。「えっ、岐阜工高ですか？」と聞き返す始末。運命のいたずらか、よもや岐阜県下随一の進学校に自分が赴任することになるなど、思いも寄らないことでした。正直自分に務まるのか、自分は岐阜高校の教員に相応しいのか等、様々な思いや迷いが交錯する中、もはや自分を信じるしかないと覚悟した時の僕は、弱冠28歳でした。

赴任して最初の職員会議資料を見て、さらにびつくり。いきなり1年生の正担任で、しかも副担任は伊藤俊一先生。伊藤先生（通称シュン）といえば、僕の高校時代の恩師であり、「古典」の授業では手厳しく叱られてばかりでしたが、苦手意識が相当強かつたわけです。いまふうに言えば「マジかよ」という感覚でした。その時の、僕の顔を見る伊藤先生の悪戯っぽい笑顔は今でもはっきり覚えていますが、実はそこには伊藤先生の教え子に対する深く温かい愛情が込められていたことに気付くのは、ずっと後のことでした。まさに「恩師の心、教え子知らず」でした。伊藤先生ごめんなさい。でも感謝しています。本当ですよ。但し、その後の8年間毎年正担任になるなんて

竹中良典

(平成元年～平成9年)



ことは、夢にも思いませんでした……。岐阜高校の生徒は、驚くほど学習意欲が高く、目標大学合格に向けて真摯な姿勢で頑張れるパワフルな高校生であることを、教壇に立った僕は日々実感するばかりでした。授業といえは、挙手あり、質問あり、板書間違いの指摘あり、ウイットに富んだ意見あり、いま振り返っても信じられないほど楽しかった。まさに打てば響く、そんな心地よさを存分に味わいました。岐阜高校ならではの経験

を持つて「リョーテン世界史」を語れるだけの教科指導力も鍛えさせてもらいました。ありがとう。教員生活31年間の中でも、特に印象深く幸せな8年間でした。思い出すだけで、胸が熱くなります。ご縁に結ばれた人生の宝物を手にしたような気持ちでいっぱいです。

困った顔を見て、してやったりという顔をしていました。当時の国際情勢について議論したいと言う生徒、受験校決定の悩みを抱えて相談に来る生徒、放課後の他愛もない雑談の相手になってくれる生徒、世界史の考査でオタクな出題をしても難なく解答してしまふ凄腕生徒など、いやはや百花繚乱、こうした数多くの生徒の若き日の一ページに関わることができた喜びは、何物にも代えがたいものでした。挙句の果て、世界史選択の生徒には、名前にちなんで「リョーテン」と呼べなどとのたまう随分我儘な教員でしたが、それを許してくれた生徒たちの寛容さには頭が上がりません。また、自信

岐阜高校の校歌を、今でも口ずさめる自分がいます。また、昔日の校舎を想うノスタルジックな感覚は今でも自分の中にあります。誰しもが憧れる白い桜花のバッジをつけた岐高生を街中で見かけると、懐かしさを感じると共にその活躍を願いたくもなります。天下にその名の轟く「岐阜県立岐阜高等学校」が、「百折不撓努めてやまず」の心意気で、更なる高みを目指して発展されますことを心より祈念いたしております。そして、「誇る最古の歴史ある」日本有数の名門高校（名峰）としての伝統と存在感をこれからも「教員OBとして讃え続けたい」とも思います。「岐阜高校に栄光あれ」と、僕は心から叫びたい。さあ皆で希望溢れる岐阜高校の輝かしい未来を祝して乾杯をしようではありませんか。最後に、岐阜高校礼讃のメールを送って筆を置くことにします。「夢を描け、岐高生。世界にはばたけ岐阜高校」

平成とともに始まった

岐阜高校とのご縁

加藤 知之

(平成元年～平成7年、
平成22年～平成24年)



今年度のもっとも若い幹事学年の皆さんと同じく平成元年4月に岐阜高校の門をくぐりました。同窓生ではありませんが、私の教員人生は、岐阜高校とのかかわりなしには話ができないと思っています。というのも、皆さんと出会った平成元年～7年までの7年間及び14年の歳月が過ぎた平成22年～23年の2年間合わせて9年間勤めたこと。華陽フロンティア高校(旧華陽高校)に勤務した際、同窓生の方と大縄場の旧校舎の話題からより深くお付き合いができるなど、岐阜高校とのご縁で多くの出会いがあったこと。さらに、二度目の勤務が校舎全面改築の時期と重なり、学校の長い歴史を振り返る貴重な機会に出会うことで、岐阜高校の素晴らしさをあらためて実感したからだと思います。

長い歴史に触れたきっかけに校庭の樹木があります。初めに赴任した当初、美しく咲いていた堤防のソメイヨシノ、プールのそばにあった大きなメタセコイア以外は意識がなく7年間を過ごしました。二度目の勤務が始まった5月頃、校庭に、なんじゃもんじゃの木(ヒトツバタゴ)がきれいな白い花をつけていることに気がつきました。

この木は、対馬、東濃地方の木曾川周辺、愛知県に隔離分布する珍しい分布形態をとることを、中津川市にある坂下高校の勤務時に知り、どうしてこの木が岐阜高校にあるのだろうと不思議に思いました。その後調べてみると、校庭には、ヒメコマツ、ウスズミザクラ、ヤマザクラ、シダレザクラ、タイサンボク、イチイ、サザンカ、ハナノキ、ウノハナ等々が、県内の代表的な木、長い歴史を踏まえたゆかりの木、記念樹として植えられていることを知り、なんじゃもんじゃの木は、県を代表する木として植えられたのではないかと聞きました。

ふとしたことで、岐阜県を代表する高校としての長い歴史とそれぞれの時代に学ぶ生徒、教師の思い等々がこの地にしみこんでいると気づくとともに、その長い歴史の一時期に皆さんと同じ時間を共有できたのだと思うと感慨深くなりました。これらの木々については、当時の田村元校長先生はじめ担当の先生方が対応を慎重に検討され、一部は有志の方のご協力により移植できたものもあったと聞いていますが、校舎全面改築の過程で残すことはできませんでした。しかし、それぞ

れの時代の思いや歴史を後世に残そうと、記録写真に撮られ校史資料室に保存していただけたことは、本当に良かったと思っています。

全面改築の終わった岐阜高校には、同窓生から寄贈されたヤマザクラ、カワヅザクラをはじめ多くの木々が植わり、ケヤキ並木のプロムナードができました。同窓生である鹿野前校長先生が、「校舎が新しくなり、市内電車もなくなり、時の移り変わりを感じましたが、昔と変わらないものが三つありました。制服、男子の詰め襟の学生服、女子の箱ひだのスカート」、高山市上室にある林間学舎「友学館」、そして岐阜高校の伝統を引き継いだ岐高生気質です」と話されていました。

今後入学してくる生徒の皆さんが、生い茂ったケヤキ並木を見つめ大きな夢を語り、岐阜高校の新しい歴史を作られるとともに、岐高生気質を引き継がれていくのだと思うと不思議な気持ちになります。

取り留めもない文章になってしまいましたが、岐阜高校と同窓生の皆さんとの出会い、平成とともに始まったご縁に感謝し、これからも大切にしていきたいと思っています。



新米教師を導いてくださった恩師

故飯尾誠太郎先生（昭和23年～昭和29年、昭和36年～昭和47年）の思い出

折戸広昭
（昭和47年卒）



右：飯尾誠太郎先生
左：折戸広昭

新任の教師として、飯尾誠太郎先生とご一緒させていただいたことが、今でも印象深く残っています。国語科の教員として赴任した先の教頭先生だったのです。最初に挨拶に伺った時、職員室の中央の席に座っておられた。驚くと同時に、困ったことになったという気持ちも今でも忘れられない。

高校1年生の時、古典を教えていたのだが、私は出来の悪い生徒で、文法の活用「けり」を変化させて文中に入れる問題で、うまく答えられなくて、先生が情けなさそうな顔をされたのです。（先生に聞くと、そんなことは全然覚えていないとのことでした。）

新任の頃、先生の現代文の授業を参観させていただいたことがありました。文中の表現をチョークで色分けし、丁寧に並べて対応させながら、板書して解説されていた。非常に明快であり、理路整然としていました。先生の語録で皆さんも記憶にあるものの中に、不可解な解答をいうと「何を分からない

ことを言っているのだ、君は。その答えはお化けだ。」を思い出す人も多いと思います。しかし、その授業を拝見してみると、「お化けだ。」の真意は違うところにあると感じました。間違った答えを「お化け」と評されたのは、雰囲気やイメージだけで答えるのではなく、一つ一つの表現から読み取れることを類推して答えることが大事であると諭されたと思っています。

もう一つ、私の教員生活で先生の言葉で何度も使わせていただいたのは、「病める者は医者に行け、弱き者は歩け、健康な者は走れ、強壮な者は競争せよ（日比野寛愛知県立旭丘校長であり、後にマラソン校長として異名がある校長先生の言葉）」を引用して、生徒に己の状況に合わせて学業に励め、と語られたことでした。それまでに聞いたことない人生訓でしたので、これはいいと思い、何度も先生の受け売りを三十有余年使わせていただきました。感謝をしています。

お酒は、お猪口で少し嗜む程度であつたと思いますが、村田英雄の「王将」がお好きで、斜に構え、前髪を少し垂らして少し甲高い声で歌っておられたことを懐かしく思い出します。

飯尾誠太郎先生は岐阜県立明智商業高校（現在は恵那南高校）と岐阜県立本巣高校（現在は本巣松陽高校）校長を歴任されました。残念ながら、平成18年に79歳でお亡くなりになりました。お家は糸貫町にあり、門構えが大きく由緒ある立派なお屋敷で、近くを通る時、飯尾先生が白い歯を見せて、笑っておられた顔が浮かんできます。飯尾誠太郎先生のご冥福をお祈りします。

四人だけの同窓会

小柳 育子
昭和47年卒

本当に久しぶりに高校の同窓生4人と日本橋で食事をした。Kちゃんとは家も近く、中学は違ったが、小学校が同じだった。高校でも、毎朝、通り道で待ち合わせて並んで登校した。Mちゃんは高3のとき、いつも一緒だった。どこへいくにもべたべたとくっついていたら、「あの2人は○○かも」と言われていたらしい。もう一人のMさんも同窓会では何度もお会いしていた。岐高の女子は人数も少なかったから、違うクラスの人ともみんなとても仲がいい。

日本橋の麒麟の像をながめ、すてきなフランス料理のレストランへ。今何をしているの？家族は？住まいは？質問の後は高校時代の話に……。Kちゃんはその頃の写真まで、スマホに入れて持ってきてくれた。写っているみんなの顔が本当にあどけない。

高校時代、Kちゃんとは夏休みになると毎朝、早起きをして2人で長良川に行った。自転車のかごに『豆単』を入れて。朝のまだヒンヤリした空気の中、だんだん頭も冴えてき

ているはずなのに、なぜか少しも単語が覚えられない。それもそのはず、河原の石に腰掛け、流れる水を2人でながめながら、英語とは全く関係のない話をするのだから……。大学の話、将来の夢、好きな人の話、趣味の話。きつというんな話題がでていたと思う。四十数年後の姿はとても想像できなかっただろう。

私は昨年3月に小学校の校長を退職した。管理職として経験した苦労を話すと3人は大笑いしながら聞いてくれた。話す自分もそのときの必死さを既に忘れて笑い話として話している。Kちゃんは現役デザイナー、個人事務所の社長さん。小さいときの夢を実現した。Mちゃんも老舗のお店のオーナーで、経理を担当。Mさんは自分で陶芸の個展を開くほどの腕前。この年になってもみんな現役で元気ががんばっている。第二の就職に少々空しさを感じていた私はたくさんの元気をもらった。本当に嬉しかった。

「楽しかったです。高校生みたいな気分になりました。育ちゃんの活躍が目につかびました。同級生の活躍はうれしいです。」そんなメールをKちゃんからもらった。やはり友だちは宝物だ。

岐高への愛と誇りを礎として

嶋野 加代
昭和47年卒

岐高の校風として、先生方が生徒たちに、未来の紳士淑女として接しておられたように思います。金華山の麓、長良川のほとりという歴史とロマンを感じさせる場所にある校舎、夏は暑く、冬は伊吹おろしが冷たいメリハリのある四季のうつろいなどの総てが、生徒ひとりひとりに、歴史と伝統に連なる者としての、誇りを抱かせます。

父親は、岐中卒で陸士に進みました。私については、特に41年卒あたりの皆様で、「若井3姉妹の一番下」として御存知の方が多いのでは。

岐高時代は、私は勉強よりも友達づくり熱心でした。今現在も、一緒に入学したというご縁で生涯の間として接して下さっている47年卒の皆様感謝しています。

6歳年上の2番目の姉は岐高時代に、AFS留学生としてアメリカに留学しました。姉が留学中に知り合ったあるご家庭が、全くとのご好意で、高校生になった私にホームステイを提供してくださいました。2年生の2学期から3年生の1学期にかけての正味8ヶ月間の留学。遠い異

国の方々から無償の愛を頂くという経験をしました。

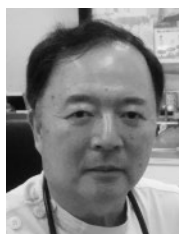
15年ほど前に、私は、ご縁があった地方政治の世界に入りました。3期12年間、家庭を築き、子育てをした町である埼玉県新座市の市議会議員を務め、3期目には初の女性議長を務めました。

ささやかな自分の経験からではあります。政治とは、未来を作る仕事であると考えています。

その手段が、過去や現在の検証と分析、未来への洞察及びテクノロジの発達などであるとすれば、政治を動かすエネルギーとは、「愛と誇り」ではないでしょうか。

岐高で培った愛と誇りを礎として、これからも頑張っていきたいと思っています。

私は岐阜高校出身である

大橋 信昭
昭和47年卒

私が岐阜高校を受験しようとしたのは、中学3年生の担任の先生の命令である。「君は岐阜高校を受けなさい。何！一教科居眠りしても合格するから！」と、とんでもない進路指導をするものだから、その気

になった。当然全教科必死に、入学試験は頑張ったのである。合格発表を見に行ったときはさすがにうれしかった。やっと受験勉強から解放され、春休みは遊び放題と思っていたからである。ところが、合格者は突然、もう記憶にないが、怪しげな暗い講堂に集められ、大量の宿題を渡され、入学式までに完成するようにとの命令が下った。これでは楽しい春休みも帳消しで、また勉強部屋に戻ることになった。問題集は難解であり、大垣の田舎者の私は苦労した。宿題を片付け、ほっとしたら入学式であった。入学式も体育館に集められ、教科書や英単語辞書や、山偵とかいう3年間苦しめられるとは思わなかった参考書などが配布された。同時に1年6組ということも知らされ、その中と同じ中学の受験者5人のうち3人が同じクラスであることが分かった。担任の先生が、高いステージに勢ぞろいされ、私はあのサングラスをはめた怖そうな先生は担任でなければよいがと思ったが、運命的なものであった。なおこのクラスは男子クラスであり、女生徒も遠くにまぶしく見えたが、いつかは男女クラスで、彼女たちともお友達になれると思っていたが、3年間男子クラスになるとは夢にも思っていなかった。おかげですっかり女子と疎遠になり、女性とまともに話ができ

るのは大学までお預けであった。初登校日、サングラスの担任の先生の教室に恐々入ったら驚いた。教室内はシーンとしており、もう教科書に真剣に、クラス仲間は向かっており、私の教科書は真白であるが、隣の生徒は半分手垢で真っ黒であった。どうして初日からこんな真剣な雰囲気なのだよ？今日はよろしくと笑顔でおしまいにならないのか？不安が高まる中、突然、例のサングラスの先生が乱入してきた。そして、机に脚を上げ、「君たちもこの高校のことは充分わかっていと思うが、その気になってもらわないと困る！」降参だ。田舎の大垣ではそんな話聞いていないよ！数学の授業が始まった。担任の先生が言うには、私の講義は完璧だから、質問は受け付けないと言われた。その代りこの先生は、土曜も日曜日も遊べないように大量の宿題を出した。授業はやっとなり程度であった。全く余裕がない。次は英語の先生が出てきた。「今日学習したことは、翌日全て記憶してください。単語のテストは毎日やりますよ。」と優しい言葉だが、最も残酷な命令であった。

帰る際、担任の先生が、「君は遠い所からの通学だから、クラブ活動などせずに、授業が終わったら、すぐに帰宅しなさい。そして勉強以外は考えなくてよろしい！」と言われた。帰りは西野町の路面電車に乗り込んだが、捕虜収容所みたいに身動きできないくらい満員であった。岐阜駅に着き国鉄大垣行きを待っていたら、同じクラスメートが帰りは一緒なので、「君、元気がないね。」と笑ってくれた。1時間に2本しか大垣行きは岐阜駅に到着しなかった。市電と国鉄電車でかなりの友人を作った。帰宅早々、勉強するしかなかった。私の頭脳では、すべての科目が難解であり、毎日の宿題に追われるだけであった。

それから、3年間、国鉄岐阜駅行と市電で西野町に、揺られながら通う日々が続いた。英単語の試験が毎日あるものだから、私はこの通学時間に覚えるしか手段がなかった。この姿を、当時同じ電車で名古屋方面に通勤している近所のサラリーマンが、私の事を勉強熱心で、二宮尊徳みたいなことを近所に言い触らすので迷惑であった。私は岐阜高校の授業に追っていくのが必死であったのである。

2年生になると、担任は「名物の国語の飯尾先生になった。毎回授業の前に儀式があった。「この黒板をこんなに綺麗にしたのは誰だ！」手を挙げた生徒は先生の前まで行き、頭をなげられ、飴玉をもらえた。そして必ず誰かが、打ち合わせたよう

に「先生、教科書を忘れました。」「そんな奴は廊下に立っとなれ！」とその生徒は廊下に立たされた。そしてこれも儀式のうちであるが、「今、廊下に立っている生徒の事をどう思うか？君はどうだ！」生徒は「彼は普段真面目であり、今日、うっかりしていたのだと思います。先生、許してやってください。」「そうか、それなら中へ入れてやれ」と廊下の立たされた生徒が教室に戻ると、「今度忘れたら、後藤ひよこの屋上に立ってもらおう！」この儀式は何回となく行われ、後藤ひよこは私の記憶にこびりついている。

2年生の後半になると、個別にこの先生と普段の事を相談できる時間を作ってもらえた。「大橋は真面目だから、今の調子で頑張るようにしなさい。何！医師になりたい？もともと勉強するように！」と手厳しい評価であった。

3年になると、受験を考えたか、皆の勉強に向かう姿勢がもつと厳しくなった。私のクラスの半部が医学部志望であった。私も頑張っているつもりであるが成績が今一である。最後の進路面接が、母親を交えて行われたが、担任の先生は私の医学部受験に猛反対であった。「いいかい、君の人生の問題だよ。」「私の人生だから医学部を受けさせてください」とこの問答に1時間を要した。帰り

の母親の機嫌は悪かった。

最後の国語の授業に、飯尾先生が励ましの歌を聞かしてくれた。「吹けば飛ぶような試験の紙にかけた命を笑わば笑え、」全部は記憶にないが、激励として忘れない。その後、医学部に入り、地域医療に従事しているが、岐阜高校の厳しさが無ければ私など、医師になれなかったであろう。

卒業式の日を受験も控えており、何の記憶もない。ただ、いい先生、いい友達に恵まれ私は大きく成長した。ありがとう、岐阜高校。私は、今でも岐阜高校卒業生であることが自慢である。



宇治茶の奥は深いもので

大橋 敏裕
昭和47年卒

私は今、平等院で知られる宇治市に住んでいます。その平等院は、昨年の秋に平成の大改修を終えて往時の姿を見せており、賑わいを見せています。さて宇治市は平等院に加え、宇治茶でも有名ですが、この一文では少し立ち入った宇治茶の魅力についてお伝えしたいと思います。

宇治茶については、きつと狭い地

域のちょっとした名産という印象をお持ちの方が多くと思います。ところがその狭小なイメージに反して、スイーツなどに宇治抹茶入りと書いてあると、日本人の誰もが不思議においしそうな印象を持ちます。こう思ってしまうのは、宇治茶と日本の歴史に由来しています。

その昔、宇治茶の味が日本でトップとされた時代があります。それはいつの時代かご存じでしょうか。それは室町時代に遡ります。鎌倉時代に京都の梅尾に初めて茶の木が植えられそれから茶の文化が広がったのですが、室町時代には將軍おつきの茶人がおり、將軍は抹茶や茶道具にこつておりました。この時期には將軍により宇治茶の味が最高と認められ、特に七つの茶畑のお茶が選定され「七名園」といわれて大切にされました。どうもその頃には宇治の茶農家が、お茶の甘みを引き出す技を開発していたと思われれます。新芽が出る頃に茶畑全体を日陰にするという逆転の発想です。

その後戦国時代にはさらに將軍や大名の間で宇治茶嗜好は高まり、抹茶を入れる「茶入れ」が、領地の代わりに褒美にされるほどでした。豊臣秀吉などは千利休を伴って宇治へ来て、宇治の水で宇治茶を飲むなどしていました。そして江戸時代に入るとそれがさらに高じて宇治抹茶は

將軍家に献上するお茶とされ、宇治茶は春を迎えると大名行列さながらに長い行列をなして江戸まで運ばれました。室町時代から江戸時代の終わりまで、実に数百年間、宇治茶はこんな環境に置かれていたわけですね。今は江戸時代の終焉から一五〇年ほどしか経っていませんから、日本人の潜在意識に宇治茶ブランドが生きていてもそりゃおかしくないですよ。

ここまでは抹茶の話ですが、煎茶の製法も宇治近郊から生まれています。実は江戸時代、將軍に献上される抹茶は、宇治村以外では生産が許されませんでした。そこで近郊の農民だった永谷宗園は抹茶に代わるおいしいお茶を作ろうと十数年苦勞してあみだしたのが煎茶だったのであります。この製法もわざわざ乾燥しにくい手揉みという方法で半日かけて茶葉を乾燥させるといふ、これまた逆転の発想による発明で、世界の中でも日本にしかない製法のお茶です。

さらにこの煎茶をもとに、抹茶用の茶畑で作られた新しいお茶が玉露です。これも宇治で生まれました。つまり時の大物たちにより守られたからだけでなく、抹茶、煎茶、玉露という日本を代表するお茶がすべて宇治近郊で生まれたことも、宇治茶の価値を高めていたのです。

宇治が生み、日本の定番となった

お茶の製法は日本のお茶ならではの特徴を生みました。そのひとつは茶を摘んですぐに酸化を止めるため、澄んだ色をしているということ。それから茶葉により淹れるお茶の色が変化、その違いを楽しめること。またお湯の温度（氷水から沸騰水まで）によって味が大きく変化し、どの温度でもおいしいこと。紅茶をはじめ、世界のほとんどのお茶は酸化させているので、濃い茶色になりますし、これらの特徴を出すことはできません。

こうした特徴は高級茶ほど顕著で、茶師がたくみに葉を選びブレンド（合組みといいますが）しています。宇治市にある由緒ある多くの店では、茶師がオリジナルの味を作るので、同じランクでも店により味が違います。特に玉露を知るとその味の深さを実感できます。宇治市にはそんな店があちこちの路地にあります。お茶を楽しむ点では別格の環境にある、そんな町が宇治です。

今、京都府では、京都南部を「お茶の京都」と呼んでアピールしています。背景には茶を淹れるのに必須の急須がない家庭が増え、味わい深いお茶の消費が減り伝統的な茶農家が減っていく危機感があるからです。そこで副知事が主導する「お茶の京都」を推進する戦略会議が設置され、実は私も招聘され一員として

加わっています。

もともとアート系のNPOとして、お茶をモチーフにした作品を作ってきたことが京都府の目にとまったのですが、今後も本業はもとより、深い宇治茶の味わいを伝える仕事にも力を尽くしたいと思っています。

最後に耳より情報をひとつ。京都の四条通には「伊右衛門」を出している「福寿園」のビルがあり、どなたでも合組みを体験でき、「自分製のお茶」を作れる変わったお店が地下に作られています。京都を旅行される際に訪れてみられてはいかがでしょうか。これにてこの拙文、終わりにさせていただきます。

学校歯科医の役割



高木 宣雄
昭和47年卒

いつの間にか還暦を過ぎ、老後のことも真剣に考えなければならぬ歳になってしまいました。歯科医師の立場から、高齢者向けに介護予防（口腔機能向上）の話をしたりもしてきましたが、だんだん参加者との歳が近づいてきています。最近はその体験を例えに使うことも多くな

り、妙な説得力が出てきたような気がします。そんな私ですが、今も年に数回は岐阜高校に行っています。と言ってももちろん勉強ではありません。父の後をうけて岐阜高校の学校歯科医になり20年以上になりました。高校の健康診断に歯科があったことを覚えていない方も多いかも知れませんが、あつたんです。健診のほかには学校保健委員会などがあり、また2年前からは生徒対象に「口の働きや重要性」の話をする機会も頂いています。そのおかげで定期的に母校を訪れることがあり、岐阜高校の移り変わりを近くで見ることができま

す。2011年には新校舎が完成し、岐阜高校全体が新しくなりました。2008年から、私に通っていた頃とはほとんど変わることなく使われていたプール、華陽校舎、北舎、理科棟、そして入学当時はまだ新しくあった本校舎も少しずつ取り壊されていきました。大して用事もないのに時々覗き込んでいた購買や、先生に「はい。花壇の掃除をしてきなさい！」と言われた中庭もいつの間にかなくなっ

ていきました。訪れるたびに思い出がひとつひとつ消えていくの寂しさとどんな風が変わっていくのかという楽しみが入り混じり、学校医で同じ47年卒の杉山君と懐かしむこともありました。新校舎は並木道（プ

自由設計の人生



葛西 淳
昭和47年卒

ロブナード）のある明るい近代的な建物です。私が後期高齢者になる頃には並木は大きく育っていることでしょう。それまでは無理かもしれないませんが、この役得がある学校歯科医を少しでも長く続けることができればありがたいと思っています。

振り返ると、好きなように生きて

きた私の人生ですが、慶応の法科を出て、何の当てもないままヨーロッパに渡り、半年ほど各地を回り、帰国すると、家庭の事情で、家業の飲食店を継ぐことになり、柳ヶ瀬で喫茶店を任されてやっていたうちに、教えることが性にあっていくというので、調理師学校の講師になり、いつの間にかその校長になっていた。地中海をテーマにしたフランス料理店をだし、本物のヨットを買って看板にしたり、（この店は2〜3年、猛烈に繁盛した後、ぼしょった。）結婚年齢高齢化、少子高齢化を憂い、（高齢出産の弊害、25歳で出産すると1200分の1、45歳で出産すると46分の1の障害者が生まれる）、

結婚相談を始めたり、占いに興味を持ち、四柱推命の先生のところへ修行にいき、長年修行して、もう、人の鑑定をしても良いと許しを受け、あたらこちらの占いのイベントで占い師をつとめたり、知的障害者の面倒をみる仕事を始めたりと、やりたいことがあればすぐに飛びつきました。

趣味も、写真、カメラ、ヨット、スキューバダイビング、テニス、社交ダンス等、手当たり次第にやりたいことに手を出し、今は、紹介もな

く飛び込んだ弓道場の先生にかわいがられて、去年の岐阜市民大会では3位入賞しました。

バブルにもあそばされ、バブルの崩壊による不景気を味わい、栄華？と挫折もいろいろと体験しました。この間、同窓会で、エリートの同級生に、「葛西は好きなように生きられていいなあ。」と言われましたが、占いを勉強して、私の中にある、鳳閣星と言う星が、私の人生を自由設計にさせて、こんなに気ままに生きさせているのだとわかりました。自分のもって生まれた星、私の日干（丙ひのえ）は火の陽、全てのの人に平等に太陽の恵みを与えるような生き方をしないとだめだ、ということ

終の仕事は、結婚相談と、占い師でもしようと思っていますが、料理も人間も好きなので、深夜食堂のおやじになっているかもしれない。残りの人生も、ネットサーフィンのように、波の赴くまま、あちらこちらへ漂流して、果たしてどここの岸に漂着するのか、という暮らしをしていくような気がします。

見えない力に導かれた 「不思議」



阿部 剛
昭和47年卒

私とカンボジア（クメール）人との出会いは9年前にさかのぼる。職場の有志11人でのブロンペンとシムムリアップを巡るありきたりのバックツアー。学生時代から日本や世界を歩き、ブラジルのサンパウロ日本人学校での3年間の生活もあり、海外旅行への興味は特になく、あくまでもお付き合いの海外旅行であった。まさか、カンボジアの小さな町が、自分にとって第二のふるさとなるろうとは……。きっかけとなったのは、見えない力に導かれたとしか言えない一人の青年との不思議な出会いである。

彼は宿泊したホテルのガードマンをしていた。彼の父親が、ポルポトとの戦いのための弾薬を牛車で運ぶ途中、弾薬が暴発し友人もろとも粉々になったため、貧しい環境の中、母親の手で育てられたとのこと。彼との出会いは、私の人生をより豊かなものにしてくれた。

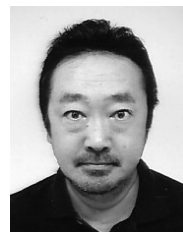
現在、彼は私を「Father」と呼び、私は彼を「Son」と呼んでいる。4年間の大学の学費の支援（といっても、年間\$800）をし、就職に必要な衣類を整え、日本へ招待し、彼の結婚式では親族席に座った。彼は完全に言語も時空をも超えてつながっている。彼の想いや考えは手にとるように分かるし、私の想いや考えは彼に伝わっている。互いに、思いやりと誠意を尽くしている。

そんな彼との関係を核に、私のかけがえのない友人たちが増えていった。彼の故郷、チャムナム（シムムリアップから西へ130km離れた小さな村）には、私を待っていてくれる彼の親族や友人たちがたくさんいる。また、内戦終結間もないカンボジアの支援をしたいという私の想いは、活動「移動絵本図書館・パンナライ」を通して、いくつかの村の子どもたちやその親たちにも伝わり、毎年の再会を楽しみにしてくれるようになった。カンボジアの人たちとのこの関わりが、自分の人生のあり

方や課題と改めて対峙するきっかけとなった。お陰で、私の現世のステージにおける大きな課題の一つが「人とつながること・人をつなぐこと」であることをはっきりとつかむことができた。

私は、人生には、その人その人に異なったステージがあり、当然のことながらそれぞれにさまざまな課題が用意されていると考えている。そして、そのことを意識し、意志をもって対峙し始めた時が、人生という旅の始まりである。私の旅立ちには、大学2年生の時。「生命」「生と死」「愛」「人生」「絶対」などの答えを探して日本や世界を歩いた。「生命」の答えとなる至上体験をしたのは、それから2年ほど経ってからだった。不思議な体験で、人生が大きく前に進んだ。さらに見えない力は、私を「教員」へと導いた。そして、退職し再任用された現在でも、「教員」はまるで天職であるかのように、私に素晴らしい日々を与えてくれている

50過ぎた僕たち



久保田 孝
昭和57年卒

大学を卒業して以来、テレビ番組のドキュメンタリーや企業CM・リクルート用ビデオなど、映像製作に携わっています。振り返ってみると、とても不思議です。なぜ僕がこんな仕事に就き、50を過ぎても尚、徹夜の連続でフラフラになりながら編集作業に追われているのか……。高校時代の僕は、そんな将来を、みじんも想像していませんでした。

50だし、もう少し楽をして、趣味のひとつにも没頭してみたいのに……。友人と飲む機会も増やせたら、どんなに楽しいか……。そんなことをつらつら妄想しながら、映像の編集機に向かっています。

ドキュメンタリー番組の仕事は、被写体となる人々や、自然現象、社会問題などと向き合います。

いま、母の腹から、生まれようとする新しい生命。

自分の都合でしか物を語らない、政治家。

大海原で、獲物と格闘する漁師。障害を持ちながら、残された能

力をフルに使い疾走するアスリート。
死の間際にある、老婆の生温かな息遣い…。

そんな人生の刹那、こみ上げる感動や怒り…を切り取り、その像をいかに分かりやすく伝えるかに、全霊をかけます。そんな毎日を30年近く続けてきました。

繰り返しますが、まさか自分がこういう道を歩むとは、高校時代の僕は想像していませんでした。

僕のことだけでありません、高校で出会った友人たちのことも。

Yが、救急で飛び込んだ瀕死の命を救うことに、一生を捧げる医師になるとは。

Kが、裸一貫、東京で堂々事業展開する起業家になるとは。

Hが、己の努力で高い評価を受けていた大手企業を辞し、先行きが決して楽でない老舗の作業を継ぐとは。

彼らは、岐阜高校で共有した時間の中で、僕に「努力の仕方」を教えてくださいました。可能性が少しでもあれば、「チャレンジする勇氣」を教えてくださいました。「学ぶことの楽しさ」を教えてくださいました。その関係

は、今でも続いています。「あいつが、あんなに頑張っているのだから、おれだって!…」

だからなんですね。お互いが、それぞれ全く想像しなかった人生を歩んでいても、お互い忙しくて何年も会えてなくても、久しぶりに再会した時、目と目が合うだけで、時の溝がすぐ埋まる気がします。

そんなかけがえの無い友人たちに、岐阜高校で出会えて、心から幸せに思います。がんばって、岐阜高校に入れて良かったと、中学生の頃の自分を褒めてあげたいです。

もう50を過ぎましたが、これからの人生も大いに楽しみです。友人たちも、きっとまた想像もしない、新しいチャレンジをするに違いありません。僕は僕でがんばります。この執筆が終わったら、また編集機に向かわなくてはなりません。やれやれ、今晚も寝れそうにないか…。

世界とつながる!



棚橋 好子
昭和57年卒

子どもの頃から歴史が大好きだった私は、考古学者になって世界遺産を見て回るのが夢でした。

しかし、大学では英語教育を学ぶことになり、中学校の教師になりました。

考古学とは無縁の生活が始まりましたが、「与えられる人生より創り出す人生がいい」と思っていた私にとって、クラスをどんな形にでも創り上げられることは楽しいものでした。

育児のため5年で教育現場から離れることになりましたが、二人の子どもが小学校にあがるのを機に、セサミクラブという塾を始め、また教育に関わる仕事に就くことになりました。

セサミクラブでは「最後までがんばり抜く」ことを大切にしています。生まれつき勉強ができる、運動ができる、などの才能を持っている子どもたちがいますが、才能の有無に関わらず最後までがんばり抜くと、感動や喜びを分かち合うことができ、人として豊かになるからです。

才能は持っていることが素晴らしいのではなく、その才能を他の人のためにも使えることがすばらしいのだと教えています。

塾を始めて16年が経ちました。

10年前からホームステイの受け入れを始め、塾生や卒業生に海外の子どもたちと交流する場を設けています。塾生を海外に連れて行き、ホームステイを経験させることもできました。

現在は国際交流のボランティアスタッフとなり、塾生だけでなく、アメリカの中高生と地元岐阜の家庭をつなぐお手伝いもしています。

世界にはいろいろな人がいて、いろいろな考えがあることを、より多くの人に肌で感じてほしいからです。

考古学者になりたいと思っていた私ですが、セサミクラブに通う、または卒業したセサミっ子たちや、岐阜の人々とともに世界中に友達を作り、世界とつながることが今の私の夢です。

会報に寄せて



高崎 和弘
昭和57年卒

高校を卒業後、新しくなった校舎を訪れたこともなく、あまり関わってこなかった私ですが、依頼を受け手記を寄せることになりました。しかし高校時代の思い出は遠い過去でよく覚えていませんし、近況を報告します。

私の仕事は映像記者です。同志社大学を卒業後、岐阜新聞に就職し整理部と報道で記者を経験させてもらい、その後、NHKに転職しました。それからは転勤の連続で、愛知県内では名古屋↓豊橋↓半田と動き、福井市↓敦賀市、松江市へ行って、少しばかり重い病気を経験し岐阜市に戻りました。そして富山市↓四日市市と動いて、現在、三重県の尾鷲市で働いています。

この間、取材環境は大きく変わり、ポケベルから始まって電源が数時間しか保たない携帯電話になり、それがガラ携、スマホへと進化し、手書きだった原稿も、パソコン（使っているのはワープロ機能ですが）となりました。通信機器は進化し続けていますが、便利になった反面、常に拘束されているような日々となって

います。スマホがあれば通じる所なら、どこでも中継ができてしまいます。もはや、どこにいるのか嘘はつけません。

4年前の東日本大震災の際は富山から一晩かけて仙台に入り気仙沼で取材しました。現在、担当している尾鷲市を含む三重県の東紀州地域も南海トラフの巨大地震では大津波が予想されており、今のテーマは地域の防災であり、少子高齢化であり、農漁村など限界集落の在り方です。

テーマは重いと思われるかもしれませんが、映像の被写体は元気なお年寄りであったり、仲の良い子どもたちであったり、元氣なりポートを発信できるような心がけています。酒の弱い私ですが、たまに旨い魚にありついて楽しく過ごそうと思っっています。

一度は病気で（実際は二度）デスク業務に就きましたが現場の記者に戻してもらい、年齢は50を過ぎて若くは決してないですが、ちょっと重いカメラを担ぎ取材を続けています。もうしばらく、現場で記者を続けて最後は岐阜に戻れたら、などと考えています。戻った際には元氣の出る話題を教えてください。よろしくお願ひ致します。

高校入学時のちょっとした「選択」



恩田 裕正
昭和57年卒

私は、現在、静岡市清水区の大学で初級中国語を教える仕事を主にしています。専門は一応中国近世思想、中でもいわゆる朱子学になります。が、仕事としては現代中国語を教えるのが中心です。高校を卒業する段階では、もっと別な「世俗的な」道を歩むつもりでしたが、結局「儒学の道」に迷い込んでしまうことになりました。

中国関係ですと、今も昔も若い時期から『三国志（演義）』好きとか漢文古典に親しんでいる方とかは、それなりにいらっしやるわけですが、私は特に興味があつたわけではありません。それでは、何故「中国畑」に進んでしまったのか。それには、高校入学時のちょっとした行動がからんでいます。

高校に進学する時、同じ中学の友人と運良く岐高に入学することができました。細かい経緯は忘れてしまいましたが、その「記念」に何か始めようということになって、私はNHKの中国語のラジオ講座を聞くことにしました。当時は中国に関する

事柄というのは、もともとずっと「マイナー」な感じがするものでした。で、若干天邪鬼な気質がある自分としては、それだけで選んだような気がします。

しかし、一度聞いて、中国語の音の「美しさ」に魅了されてしまいました。それで俄然やる気が出て、ラジオ講座を1年間、テレビ講座を2年間続け、初級レベルに止まりましたが、かなり真面目に学習に取り組みました。そして、そのまま大学の第二外国語も中国語を選択することになり、専門も中国哲学専攻に進み、北京に留学もして、現在に至ったわけです。

こうして、高校入学時のちょっとした「選択」、しかも特に強い興味や関心に導かれたわけではない単なる「思いつき」が、その後の一生の方向を決めてしまいました。中国語を履修する学生にはラジオ講座の聴取を勧めています。が、（それもきっかけの一つとなり）それぞれの方法で自らの進む道を見つけて欲しいと思いつつ、自分のこの「偶然の選択」のことを思い返すことがあります。

岐高からの贈り物



増田英次(要)
昭和57年卒

岐高を卒業して今年で35年を迎えます。今は岐阜に実家もないため、帰省することはなく、岐阜で過ごした倍近くの年月を既に東京で過ごしている私にとって、岐阜はやや遠い存在となりました。

しかし、それはあくまで物理的距離での話のこと。私たちの信念は、過去の記憶の集合体で出来上がっていると云われていますが、私が岐高で過ごした3年間は、私の人生において、「信念」という心の礎を築いた、決して忘れることができない刻だったということができません。そういう意味で岐高は、時空を超えて、「今」正に私と共にある存在なのです。

心身共に実に幸せな小中学校の9年間が人生の陽の時期であったとすれば、岐校の3年間は、陰の時期でした。しかし、人は、千辛万苦の時代こそ心に深く刻まれるものです。紙幅の関係で、詳しくは昨年上梓した「人生を変える正しい努力の法則」(かんき出版)に譲りますが(と、ちやっぴかり宣伝(笑))、岐校の図書館で出会った一冊の本がなければ、

現在の私は存在していなかったことを今想う時、私の人生における「百折不撓」の土台は岐校から与えられ、岐校で育まれたと感じずにはいられません。

また、私は、本職の他に、副業として写真家としての道も歩み始めていますが、その基礎も、私が写真部に所属していた岐校の3年間で養われたものにほかなりません。

私を育ててくれた岐校にこの6月には35年ぶりに訪れます。今は新校舎となり、昔の面影は残っていないけれども、是非当時の図書館辺りを訪れて、万感の想いに浸るのもよし、新校舎を見て、刻と共に全てが移りゆくのを感じながら「歳をとったのかな」と我を振り返るのもよし、暫し青春のあの刻を、心だけではなく五感の全てで堪能できる日を心から楽しみにしています。

独立しました



広瀬 幸泰
昭和57年卒

私はいま独立したビジネスコンサルタントとして企業の事業開発や人材開発のお手伝いをしています。オ

フィスを東京・大森駅のそばに設け、品川周辺の企業を相手にしています。

独立する前に2つの会社を経験しました。最初はシンクタンクです。ここでは調査などの仕事をしましたが、10年もすると実戦に関われない仕事が多くなりました。そんな時、知人がいたソフトウェア開発会社に入社しました。それが2社目です。大企業の看板が外れた営業経験はためになりました。

親兄弟からは心配されました。父が事業を廃業させた経緯を見てきたせいか、2人の兄はいずれも公務員です。しかし家内が心配を口にしなかつたのは凄いです。他人事じゃなかつたからです。

独立して12年の間に事業も変化しました。当初はシステム開発をメインにしましたが収益で行き詰まりましたので、コンサルに重心を置き直そうと思いました。オフィスの移転は重要な決断になりました。それ以前はマンションを使っていたが、客を迎えるのに天井の高いゆつたりしたビルが必要になったからです。しかし引越した直後にリーマンショックに襲われ見込み案件が中止・延期になり、賃料増加と売上減少のダブルパンチを食らいました。

この状況が私の漠然とした態度を変えてくれました。開発から足を洗いコンサル一本に絞りました。腹の底にあった、自分は両方できるという自負がマイナスになることが分

かったのです。移転は試練になりましたが、自分は何をすべきかを冷静に考える時間ができました。教材開発に身が入り、コンサルへの軌道修正も早まりました。最近は上場企業の社長ともお仕事をしています。助言を真剣に聞いてくださるのは、聞きもしないことを私が言うからです。それだけ孤独なのだと感じます。

母は仕事が不安定な私を可哀想に思うのか岐阜に帰ってこいといいますが、岐阜に帰ったら干上がってしまうから駄目だと応えています。独立してから沢山の友にも巡り会えました。私が躓いたところもよく見てくれています。そうした繋がりに支えられて今があります。

マリンバに魅せられて



井上 有子
平成4年卒

「岐高なのに何故音楽の道へ？」「何故マリンバを？」と星の数ほど訊かれた。それは、どちらも自然な

導きがあったから。当時、公立音楽科に打楽器専攻が無かった。水泳部OBの父と幼き頃から岐高のプールで泳ぎ、慣れ親しんでいた。ブラスバンド同好会があると知った。亡母の胎内でもマリンバを聴いていた。

高校生活は、皆さんの縁の下の力持ち役で貢献（成績に關し）。入学と同時に音大進学を決めた為、授業中は沈黙考、禅修業に励み、音楽と体育では水を得た魚に変身。放課後は、マリンバの師匠に反対されつつも、部活で練習を言い訳にブラスバンド部へ。週末はレッスンで上京もし、多忙。でも大好きな恩師・仲間とのいる所だったから、気づけば皆勤賞まで頂いた。

ブラスバンド部（現吹奏楽部）での活動。入学年に同好会から部へ昇格。とはいえ楽器が全く足りず、ソロコンテストは毎回自前マリンバを親に運搬を頼み、中高連続優勝（岐阜で私が初めてらしいが何とか親への恩返し?）。一年生の吹奏楽コンクールは人数規定に満たずとも、炎天下の大縄場々市民会館を木琴を引き摺って運べど、出場。顧問の先生に、参加費が勿体ない、引率が面倒と出場を渋られたり。夏の野球応援、数少ない楽器の一つの大太鼓を応援団に貸し、無残な姿で返されたあの虚しさ。それでも確実に実績を積み、楽器購入費を承認され、新品の楽器

を奏でたあの悦び！まさに百折不撓の結果!?

さて、マリンバは現在も楽器自体が進化中、ソロ作品や現代音楽も増え、学びと興味に尽きない。岐高時代に経験した純粋な音楽の愉しさがあから、非生産的な底なし沼の「音が苦」世界にも未だに魅了され、浸かっていられるのかも？

教育実習。岐高でお世話になり、先輩に音楽の魅力を少々お伝えしたつもりだが、現在L.A.在住になり、同窓生の皆さんにも感謝と愛を込めて、百折不撓のマリンバ生音楽をコンサートでシェア出来る時が来れば、と願っている。

岐高と長良川のある風景



大森真喜子
平成4年卒

岐高での私の思い出は、常に長良川との景色の中にあります。川北（と言っても、岐阜市外でしたが）に住んでいた私は、毎日、忠節橋を渡って通学していました。

同じ中学校出身の友達と、堤防沿いの桜の木の下を歩いた合格発表、そして入学式。入学後は、部活動後に下校する際、夕日が反射してキラ

キラ光る長良川を眺めるのが好きでした。一番のお気に入り、市内電車の車窓から忠節橋越しに見渡す、川面に雪が降りしきる白銀の世界。絶景でした。

河川敷のグラウンドでは、確か、応援団や陸上部のみんなが汗を流して活動されていたように記憶しています。在学中には、大きな台風が直撃して流され、鵜飼船が打ち上げられたこともありましたね。

名鉄揖斐谷汲線と市内電車が廢線になる時には、当時2歳になる直前だった娘を連れて帰省しました。私が好きだった、電車の窓越しに見える長良川と母校の姿を、もう一度見おきたかったから。そして、娘にも見てほしかったから。もちろん、娘はその時のことを覚えていませんが……その時に購入した路面電車の模型は、今でも我が家の玩具箱にあります。

今では、道路上の線路もきれいに剥がされ、西野町周辺の景色も変わり、校舎も新しく建て替えられました。

私が通学していた頃の面影は残っていないかもしれないけれど、それでも、帰省の折には、長良川河畔の母高を眺めるのが秘かな楽しみです。最近では、忠節橋より大縄場大橋を渡る人が多いのですが、子どもたちも「グルグル回ったら、

お母さんが通ってた高校が見えるんだよね」と言ってくれます。

―千仞の嶽 金華山 百里の水 長良川―

我らが母校岐阜高校は、いつまでも、そこに在り続けてほしいと心より願っています。

一人一人の教育的ニーズに応じた特別支援教育の実現に向けて



野田 剛志
平成4年卒

教員20年目。岐阜県内の小・中・特別支援学校計6校で、通常学級7年、特別支援学級7年、特別支援学校3年、そして今年度、発達障がい通級指導教室3年目を迎える。児童の障がい種別は多種多様であり、障がい特性や程度、個性を含めると千差万別である。

発達障がいにはアンバランスな認知特性や不注意、多動などのために、気持ちのコントロールや人とのかわり合いなどが苦手で、集団活動における社会性・協調性の困難さとなって表れることが多い。しかし、アメリカ精神医学会のDSM-IVや、世界保健機関のICD-10など、

医学界の診断基準は流動的である。教育界においても効果的な指導法や教育課程については、今後の実践の成果に期待されるところが大きい。

社会性や協調性は人として大切な力であるが、情報社会の今日、「かわり合う力」は益々重要となった。発達障がい児との学習を通して、一人一人の教育的ニーズに応じた特別支援教育とは、本質的に障がいの有無にかかわらず、全ての子どもにとっての「教育そのもの」なのだ。子ども達から学んだ。特別支援教育では、一人一人の子どもの「総合的な理解」を基盤とした確かな理解があつて初めて教育の内容と方法が検討される。教科の内容を前提として、有効な指導方法を追究する通常の教科指導に対する、ある意味でのアンチ・テーゼを内包している。

発達障がい通級指導教室に通う、岐阜県内約1000名の目の前の子ども達は、日々成長している。「待たなし」の最前線の現場では、限られた予算・人員・体制の中で、教師個人や各学校のチームワークで精一杯凌ぐ日々が続く。教員の資質向上が叫ばれ続けて久しい。制約された条件の中でなく、条件にかかわらず、ただひたすらに行う。私が学んだ岐高魂である。

あるべき理想像を純粹かつ具体的に

に描き、現状の課題を冷静に整理・分析する。そして、実現へのビジョンを示して共に歩む。岐高時代、高校教師の学力を試すような生徒でさえも慈悲寛大に受け止め、一人一人にに応じて適切にご指導くださった恩師の心と姿に学び、素直に、謙虚に、心雄々しく、「百折不撓」の志で、共に日本の教育を繋ぐ。

誰もが主人公



横井 聡
平成4年卒

私は幼き頃から学ぶことが好きで、学問の楽しさを胸に、憧れの岐阜高校に入学しました。そして高校では文武両道、スポーツも恋愛も、ある意味、欲張りな理想を掲げがちだった私は、優等生でありたい自分と、目標のひとつでも欠けたら己の価値がなくなってしまうという偏った思考の狭間で、青春特有の悩みを抱えながら高校時代を過ごすことになりました。そんな私が3年間を乗り切ることができたのは、加藤知之先生をはじめとする恩師との出会いや、志高く友人思いの同級生の存在があつたからこそで、感謝の気持ちでいっぱいです。

数学が好きで、将来は研究の道へ進みたいと考えていた私ですが、大学時代に小説を書くことに目覚め、文学賞にも応募するようになりました。何か特別なきっかけがあつたというよりは、「自分は完全な理系人間だ」と思い込み、蓋をしていた文学の筆箱が自然に開いた」ような感覚です。理系の青一色だった水槽に、文系の赤色がぼとりぼとりと一滴ずつ落ちていき、嵩も増し、混ざり合い、紫へと変わってゆく……その心地よさを今でも覚えています。本来の自分は理系・文系それぞれの要素を併せ持っていたのだと素直に受け入れられた瞬間でした。

卒業後は作家を志し、夢だけを抱えて一念発起で上京し、2009年に念願だった小説『六香物語詩曲』（奥條聡・名義）を出版しました。岐阜の高校を出た青年が東京で成長していく物語です。私自身の人生の歩みと重なるものもあります。そして嬉しいことに、昨年の岐阜高校同窓会を機に同級生たちが私の本の存在を知り、読んで感想をくれるようになりました。書き手にとって、これほど執筆の原動力になることはありません。

時を経て思うのは、幼き日からの目標を順調に達成していく人生も素晴らしい、それとは逆に、さまざまに分岐点を通り、想像もしていな

かった方向へ進む人生も尊いことです。私は高校在学時に思い描いた夢とは違う場所で、また幸せを感じられるようになり、人生には進んだ道それぞれに、種類の異なる幸福がちゃんと用意されているのだと実感しています。それは岐阜高校卒業のみなさんにも、きつと当てはまるでしょう。まさに、人生、誰もが主人公ですね。

私は東京に出たからこそ、故郷である岐阜の素晴らしさを、より深く感じるようになりました。私たちの幹事年であるこの六月の同窓会成功に向け、協力し合った同級生との絆をこれからも大切にして、岐阜高校出身の誇りとともに生きていきたいです。

私の思い出



木村 真哉
平成4年卒

今年の正月、小雪が舞う中、卒業以来23年ぶりに岐阜高校を訪れました。高校3年の夏にそれまで住んでいた鷺山からさらに北部、城田寺に引越しをした私は、当時同じ中学からの友達と片道約6キロを自転車で行っておりました。

あの頃はまだ忠節橋の上を路面電車が走っていたなあと思いつながら、趣味で日課にしているランニングで忠節橋を渡り長良川の堤防沿いに走るとその先に高校が……しかしながら私たちが通ったあの校舎や体育館はそこには無く、真っ白で大変立派な建物に生まれ変わっていました。学生時代は恥ずかしながら入学時から右肩下がりに成績は落ちていき、いつも先生方にはご心配とご迷惑をおかけして正直つらいイメージしかなく、先日妹から「あの頃お兄ちゃん英単語が憶えられなくて、泣きながら親単（オヤタン）食べてたものね」と。人はつらい記憶をすぐに忘れてしまうように出来ているようです。

そんな学生時代の中で一番思い出深いことは、2年生から所属していた応援団での出来事でした。あの頃は授業が終わると、自分の生まれた年の昭和48年に寄贈と刻印がある大きな和太鼓を抱えて長良川の河川敷まで行き、寒い日も暑い日も練習、夏が過ぎる頃には学生服が汗で真っ白になることもありました。そして3年生の夏、硬式野球部の同級生の皆があの県立岐阜商業高校と長良川球場で接戦を演じた試合、甲子園常連校の応援にも負けないように必死で応援したことを憶えています。また、早い時期に進学先が決まってい

たこともあり、センター試験会場の岐阜大学前で大きな岐阜高校の旗を振り、試験を受けることなく応援をしておりました。

現在は小さい頃からの目標であった家業である歯科医師となり、岐阜と神奈川で歯科医師として日常臨床に携わり、また3人の子の父として日々生活をしております。最近インターネットの普及もあり、23年ぶりに学生時代にあまり接点のなかった同級生の方々の治療もさせていただいたり、お話をする機会が増えております。今後もこのご縁を大切にしたいと思っております。

一片の木に内在する

岐阜の森



桑原 賢典
平成4年卒

早稲田大学大学院を卒業後、北川原温先生（現東京藝術大学教授）の設計事務所です。初めて担当をした案件は、美濃市の「岐阜県立森林文化アカデミー」でした。それは、それまでの日本になかった大規模木造学校のプロポーザルコンペでした。まだ右も左もわからない私でしたが、岐阜出身者だったため、「桑原君、やつ

てみる」と北川原先生が任せてくれました。

事務所に泊まり込んで提案書を作成し、結果は見事当選。二酸化炭素を吸収しCストックするエコマテリアルとしての木の循環利用、岐阜の特性である境界領域としての里山の概念の空間化、木の特性を生かし日本古来の工法を発展継承させた全く新しい構造などが注目され、当時において新鮮な考えと捉えられ、時代の要請と合致しました。

現場では1年以上にわたり同僚と美濃市のアパートに常駐し、現場管理事務所との行き来の日々。工務店の事務所の明かりが消えた後も夜遅くまで検討項目や翌日の指示事項をまとめる日が続きました。そんななか、仕事に疲れた時に、心を癒してくれたのは近くを流れる長良川でした。

多数の地元の工務店や大工さんと、時には喧嘩しながら話し合い、当時若手だった木質構造設計家・稲山正弘氏（現東京大学教授）と木構造のモックアップを見て現場での組み方などに頭を悩ませながら、木の自然の特性を生かしたデザインやディテールを追求しました。そしてこの経験が岐阜の森林文化への思いを再確認させ、なにより郷里の地である岐阜に一つの足跡が残せたことを嬉しく思いました。この案件は、

関係者皆さまの努力の甲斐もあって、日本建築学会賞やアルカシア建築賞など国内外数々の賞を獲得しました。私にとりましてこれが設計活動の原点となっております。

現在は岐阜の木の良さをもっとわかってもらうため、東京での住宅やオフィス計画においても、奥美濃や東濃のヒノキを使用しています。それぞれの建築から「一片の木に内在された岐阜の森」が木のぬくもりを通して感じられます。

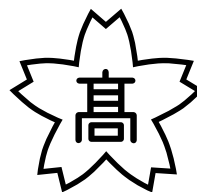
アトリエのある下北沢は、小田急線地下化に伴う再開発途中です。その再開発のワークショップに一区民として協力しておりますが、今の下北沢は、近年海外からの旅行者が急増し、様々な賛否のあるなか、新しい街へと生まれ変わるダイナミズムの熱気に包まれています。しかし、私の心の底には「元気がなくなっていると言われている多くの地方都市の中で、少しでも岐阜の元気が出るようなことはないか」という思いが常にあります。

信長が岐阜と改め市を開いて約450年ですが、今後さらに先の450年後を見据えたビジョンと強いコンセプトをもって、オンラインの良さを生かした新しい岐阜の街を皆さんと創り出していけることを強く願っています。



私たちが子どもの頃、
一千年の未来から、時の流れをこえてヒー
ローがやってきた。

未来は、私たちのすぐそばにあった。
その未来で、人々は病気を克服し、快適な
暮らしを手に入れていた。
宇宙に飛び出し、他の惑星と行き来する
こともできた。



時間を操り、過去から未来へと時間旅行
をすることさえできた。
そんな見果てぬ夢が、いつも私たちを進化
させてきた。

大人になった今、私たちの未来はどこにあ
るのだろう。
いつの時代も、未来を信じ、夢を見続けた
者だけが、未来へのパスポートを手にする
ことができる。



君ら 国宝たれ

PTA会長 石原 幸喜



それぞれが国の宝になれるのです。岐高生、君ら、国の宝となれ！

【咲いた花見て喜ぶならば】

咲かせた根つ子の恩を知れ！
 全ての子どもには等しく、生命を与えた父母がいます。全ての子どもには、美しい魂を育んでくれた人々がいます。皆さんは大輪の花。これから更に美しくなり、その芳香は周辺を魅了していくことでしょう。しかし、その美しい花は家族や学校・地域の根つ子が、地中深くひっそりとそしてどっしりとあるから美しいのです。岐高生の皆さん、卒業を機に皆さんの【根つ子】に感謝を伝えてください。
 保護者の皆さまへ。

3年生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。饒として、最澄が記した『山家学生式』にある言葉を贈ります。
 【国宝とは何物ぞ 宝とは道心なり(道心||道を修める心) 道心ある人を 名付けて国宝と為す 故に古人の言く 径寸十枚、是れ国宝に非ず(径寸||財宝) 一隅を照らす 此れ則ち国宝なりと】

皆さんは岐阜の宝です。それぞれが夢に向かって飛び立っていきます。長じて世界のため日本のため大活躍をすることでしょう。しかし、全ての人が思い描いたように人生を歩むわけではありません。今置かれた環境で、心と脳をフル稼働して出来る限りのことを精一杯やるこれが【一隅を照らす】ことです。これに大小貴賤はありません。

いよいよ、愛しい子どもが旅立ちを迎えます。十八年間とおしんで慈しんで育てた子どもです。寂寥とした思いは拭えません。遠い昔意気揚々と親離れた私達が、今子離れの辛さを味わっています。卒業式の今日、その思いをさせた私達自身の親にも感謝を表す良い機会ではないかと思えます。
 PTA活動にご理解・ご協力賜りましたこと、心よりお礼申し上げます。本当に有難うございました。

卒業生の皆さんへ

3年学年委員長 安藤 勇志

3年生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

三年前の春、岐阜高校の門をくぐり期待と不安、そして環境の変化に戸惑い苦しんだこともあったと思います。そんな中、少しずつ環境になれ自分の居場所ができ、仲間とともに学習や部活動と支えあい高め合うことができたのではないのでしょうか。そんな安定した生活をまた一歩踏み出すときが来しました。

振り返ってみると、岐阜高校での生活は皆さんにとつて、大きな成長と変化を遂げたかけがえのない三年間だったと思います。これまで築上げた継続力は必ず役に立つことでしょう。どうか成長を助けてくださった先生方、保護者の方々への感謝をもって次のステップへ向かってください。

これからは、それぞれが目標とする進路へと進み、社会に出て行く上で、専門的な分野を学ぶ事と思えます。どうか知り得た知識と技術を社会のために、人のために、自分のために生かしてください。そして、これからの社会を背負う、そんな大きな志を持って一歩一歩地に足を付けて進むことを期待します。『勇往邁進』何があってもひるまずに自分の選んだ道を信じ、夢へと繋げていくことを願います。

贈る言葉

3年学年副委員長 間所まなみ

ご卒業おめでとうございます。校長先生をはじめ諸先生方のお力添えをいただき、卒業のこの日を迎えられたことを本当に嬉しく思っています。ありがとうございます。

希望を胸に入學し、先生方や多くの友達からたくさんのことを学び、大きく成長した三年間でした。自分の思いどおりになったこともなかったことも、たくさんあったと思いますが、まずは、三年間、この誇り高き岐阜高校に学びやりきったという事は、それだけで素晴らしいことと思っています。

終わりは始まり、と言われますが、人生は、本当にそのとおりで、その繰り返しが続きます。大いに自分の可能性に期待して、立ち止まり、真剣に悩み考えながら進んでください。必ずその時々手を差し伸べてくれる人が現われます。そうしたら、大いに感謝し、自分の歩んできた足跡を振り返って、それをかみしめてください。

「若さという宝物」を持っている皆さん、この岐阜高校で学んだことが、自分の人生を組み立てている、なくてはならない大切な柱の一本であることが、将来分かったときが来ると思えます。
 徳川家康の遺訓に、「人の一生は重荷を負うて遠き道を行くがごとし。急ぐべからず。…」というのがあります。人生は決してバラ色ではありませんが、豊かな人生を歩んでいかれることを心から願っています。

卒業おめでとう！使命感をもつて！

進路指導部

3年生の皆さん、卒業おめでとうござい
ます。

卒業生諸君はこの大学受験を通して、一歩大人に近づいたように思います。大人とはただ年齢を重ねた人間のことでありません。大人である条件として、いろいろあるでしょうが「使命感を持つ」という内面的変化はかなり重要なものだと思います。使命感とはまさに「命の使い方」のことです。大学に進学し社会へ出るまでもう少し時間がある君たちに使命感などと言っても実感することは少ないかもしれませんが。たとえば何かのために「やらなければ！頑張らなければ！」と思いつくようなとき、それは使命感なのかもしれません。皆さんはこの受験を通して「やらねば」と最後まで頑張ってくれました。使命感をもって自ら行動したことが人の役に立っているとわかった時や、自分の活躍が周りから認められたときの充実感は何物にも換えられませんが、生きていくと実感するのはそんな時ではないでしょうか。



センター試験壮行会



応援団

校歌の中にもあるように、私たちは卒業生諸君が公のために活躍し、光輝くことを願っています。長く受け継がれている本校の校訓「百折不撓・自强不息」をモチーフとして人のために頑張り抜いていただきたいと願います。岐高生の進路選択はこれから先が本番です。君たちは今後、年齢を重ねる中で社会や世間が見えてくるでしょう。そして「何に命を使うか」を選ぶこととなります。誰であろうとも進路選択を避けることはできません。だからこそ積極的に自分の頭で考え、自分の足で動き、積極的に周りに働きかけ、そして相談するなかで進路選択してください。

君たちが30歳を迎え本格的に働き始めるころには今現在ではあり得ないような職業が出現し、もしかしたら君たちの誰かがそのようなフロンティアビジネスの担い手になっているかもしれません。大きな可能性と高い能力を持った君たちがどんな使命感と出会うのか、そしてその使命感と共に充実した人生を送ることを期待します。

平成27年度入試 大学入試センター試験自己採点結果 (対全国 平均点比較)

		国語 (200)	数学ⅠA (100)	数学ⅡB (100)	英語 (200)	リスニング (50)	世界史B (100)	日本史B (100)	地理B (100)	現代社会 (100)	物理 (100)	化学 (100)	生物 (100)	物理基礎 (50)	化学基礎 (50)	生物基礎 (50)	6-7文系 (900)	5-7理系 (900)
本年度平均点	本校	150.3	82.4	59.4	157.1	43.5	80.8	75.7	67.5	66.8	80.9	76.9	73.1	43.3	44.0	35.8	668.9	685.3
	全国	119.2	61.3	39.3	116.2	35.4	65.6	62.0	58.6	59.0	64.3	62.5	55.0	31.5	35.3	26.7	523.0	577.0
昨年度平均点	本校	124.7	79.6	73.7	159.1	41.4	76.7	77.7	78.5	65.6	77.8	85.2	68.2				651.9	683.3
	全国	98.7	62.1	53.9	118.9	33.2	68.4	66.3	69.7	58.3	61.6	69.4	53.3				534.0	566.0

総合点は河合塾予想 他は大学入試センター発表(理科専門科目得点調整後)

大学入試センター試験

1月17日(土)、1月18日(日)の両日、大学入試センター試験が行われ、本校は岐阜聖徳学園大学岐阜キャンパスで受験しました。

個人個人では結果が良かった生徒もいれば、不本意な結果となる生徒もいたようです。

新課程1年目でもあり、また25年ぶりに理科で得点調整が行われるなど、今年は波乱のセンター試験でしたが3年生全員がよく健闘してくれました。

2月25日からは国公立2次試験が始まります。2次記述試験に向け大いに努力し実力をいかに発揮してくれることを願います。



センター試験▲▶
岐阜聖徳学園大学会場



先輩から後輩へ 「センター試験を終えて」

東京(文I)志望

センター試験2日目が終わった後、いろいろな気持ちで混ざって興奮していました。正直、一番最初の教科世界史の最初の問題は「これはセンター試験なんだ」という思いがあり、頭の中では動揺していたけれど、問題に集中し始めるといつとも何も変わりませんでした。試験中にふとこれは模範なんだと錯覚することもあったくらいです。無事に二日間を終えて「やらかした」という思いはほとんどありませんでした。自己採点のことと考えると急に緊張し始めました。おそらく、本番に臨むときよりも心がそわそわしたと思います。結局当日には自己採点せず、翌日皆と一緒にすることにしました。その方が喜びも悲しみも共有できると思っただけです。そして実際に翌日に自己採点してみると、過去最高得点でした。今までやってきたどんな模範の結果よりも良かったです。何が言いたいかというと、試験中(二日間)は絶対に後ろ向きな考え方をしないことです。試験が終わったときのことを考えると、誰でもパフォーマンスが落ちています。だから結果は考えず、先ではなく今のことをだけを考えてこの試験を乗り越えてください!!努力はその人を裏切りません。

東京(理I)志望

センター試験は目標点に届かず、あまりよろしくないものだったと思います。というところでなぜ取れなかったかを考えていきます。まず第一に準備が遅かったという事です。受験勉強を始めるのが遅かった。受験勉強を始めたのは夏休みに入ってからでした。客観的に振り返ってみると、もっと勉強できたのではないかと思います。始めるのが早ければ早いほど、後で余裕が持てたと思います。さらにセンター対策もほぼほぼしていません。学校でやる以外は2次向けの勉強をしていました。センターの過去問や追試験もやればよかったと思います。二つ目に当日の焦りです。特に数学II Bは時間もある程度あったので、落ち着けばよかったのに計算ミスで10点以上落とした。当日は演習と違って、少しは緊張するので、落ち着いて正確に解くことを意識すべきだったと思います。2次試験まで一か月くらいありますが、センターでなぜ取れなかったのかも意識して、それを活かせるようにしていきたいです。

京都(文志望)

センター試験を終えての第一感はい「やっぱり思い通り

はいかないものだな」という、どこか客観的なものでしたが、常に頭の中にあっただセンター試験と2次試験の比率を再度考えてみると、「結局は2次試験の勝負。これから勉強次第だ。」と前向きな気持ちで会場を出ました。初日の文系教科。得点源としていた歴史2科目で思いの外迷う問題が多く、英語もやや問題が変化するなど想定外もありましたが、常に平常心を心掛け、見込み通りだと感じて初日を終えました。2日目は数学II Bがこれまで取り組んできた問題を上回る難度でただただ焦りましたが、「もともと数学II Bはウイークポイント。みんなできていないはず」と割り切って、頭を2次試験に切り替えようと思えました。今、自己採点を終え、合格者平均と見聞きしている85%程度は確保でき、安堵しています。もともとセーフティリードも絶望的なほどハイエンドもないと思ってきたので、油断はもちろん、焦りもなく2次試験に向かえそうです。また、前日に人生で初めて「眠れない夜を経験しました。一時間半の間、布団の中で眠れない」というのは苦しいものでした。緊張を自覚し、ペースを尽くせしたセンター試験だったと思います。また、受験者数5000人、そのうち岐阜生4000人という小さく、知った顔ばかりの会場でも、普通段通りの力の発揮に繋がりました。試験前の時間に次の教科を見据え、お互いの知識を惜しみなく伝え合い、励まし合った仲間たちに感謝し、今後も刺激し合いながら、「団体戦」で今後の勉強に向かしていきたいです。

京都(工志望)

京都大学工学部の入試配点(センター)は地歴100・国語50・英語50であり、地歴のウエイトが非常に高い。そのため、センター試験が始まってすぐの地歴のテストが一番重要だと思つた。とても緊張した。もともと国語と英語の読解には自信があったので、冬休み中は主に英文法を、冬休みが明けてからは地理の演習を徹底的に行つた。しかし、英語の点数が伸びたのに対して、地理の得点はなかなか伸びなかった。地理の試験中は、はじめは順調に解き進めていたが、第4問、第5問と手が止まり、悩んでしまった。特に第4問の地誌では最も勉強した南米が出たのだが、解けなくて余計に焦ってしまった。英語では新傾向問題が出たが、そこを飛ばして最後やることで、比較的余裕をもって答えられた。自己採点の結果、やはり地理は芳しくなかったが、英語がよかったので、目標となる点数は何と超えることができた。他の教科に触れておくと、国語についてはいつも通り解くことができた。数学IAは選択問題の第4問で混乱し、急速第6問に変更した。このようなこともあるので、選択問題を何を選択するか決めた上で、選択しなかったものもある程度解けるようにしておくべきだと改めて思つた。II Bは悪い意味で模範並だった。迷ったらすぐ飛ばす癖をつけておいてよかった。物理・化学もいつも通り解けた。総括すると「地理以外は満足」という感触だった。(それだけに地理が惜しまれるが、また、II Bも受験時は失敗し

たイメージだったが、自己採点してみると思いのほか良かった。前述したように配点が配点なのでギリギリの点数だったが、総合点としては良しである。「どこか悪ければどこか良い」というのはよく聞く言葉だが、まさにその通りだと感じた。

名古屋(文志望)

センター前日の夜、実は私はよく眠れませんでした。なんとか眠って朝起きた後も不安で一杯。かなり緊張していたと思います。私の両親の車で送ってもらったのですが、試験の話は一切せず、家族と本当はどうでもいい、いつも通りの会話をしながら試験会場へ向かいました。今思えば、ここで朝の緊張がかなりほぐれたと思います。控室に入った後も、友人といつとも同じような会話をすることで、だいぶリラックスすることができました。「普段通り」でいることの大切さを改めて痛感しました。試験の際は、監督官の方の話を聞いている時に一番緊張していたと思います。そんな時は前日の学年集会を思い出して、深呼吸。これはかなりの効果を発揮しました。また、まわりに見知った人がいるのは心強かったです。試験会場に行くといつもお世話になっている先生方がいる。控室や会場で友達とおしゃべりができる、これらのことには私で冷静に受験できたこととかなり関係があると思います。また2次試験が残っており、油断できない状況ではありますが、まずはセンター試験当日にいつも通り接してくれた家族、先生方、友達に感謝したいと思います。

名古屋(工志望)

私はセンターが苦手で、学校でのセンタープレでも、目標に届かない結果しかとることができなかった。不安が残ったまま、センターの本番を迎えました。前日の学年集会で言われた「深呼吸」を何度も行い、たとえ根拠がなくても、自分に「大丈夫」と言い聞かせました。また、前日の夜は不安要素があっても夜はいつもより早く寝たので、朝はすっきりと目覚めることができました。本番も、問題が配布される間や、分らない問題に出会ったときも深呼吸をして、焦らなないようにじっくりと問題を解きました。そのおかげで、落ち着くことができたので、本番でいつも以上の力が出て、自己最高点が取れました。センターを通じて、気持ちをしっかりと保ち、自信を持って取り組むことが大切だと実感しました。このことを2次試験でも活かせるように、また努力を重ねていきたいです。

岐阜(医志望)

身体的にも精神的にも非常に疲れた二日間でした。1日目は朝起きて熱があり、絶望的な気持ちになりましたが、病院に行って薬を飲んだら気分もよくなり、自分でも不思議なくらい落ち着いて受験することができました。

日本史が思ったよりも難しかったけれど、次の国語から気を取り直してできたのでとれうれしかった。2日目は教I Aは簡単だったので、ミスなく見直しもつかりできました。教II Bは問題量も多く大変でしたが、取りこぼしなくとれたと思います。センターは終わりましたが、受験勉強はまだ続きます。これからもう2次に向けて今まで以上に力を伸ばせるように日々努力していきたいです。

福井(医志望)

12月頃まではなかなか点数も伸びなかったけど、冬休み、センター特編を通じて着実に力をつけていけたのでよかったです。理科は今年から新課程で不安だったが、模範の復習をしたり、問題集のできない所を一つ一つ地道につぶしていけば何とかなると分かった。本番はいつも通りやりやろと思っていたけど、国・数はなかなか思うように進まなかった。教II Bでやられたので、三角比の問題はいろいろなパターンに慣れておけばよかったと思つた。数学で落ち着けなかったのが心残り。出題形式が変わったところは割と落ちていくことができた。英語は追試の形式が出たと思うから、目を通しておくべきだったと思う。本番の環境は暖房が割かれたと思つた。あと照明が暗くて目が疲れた。後ろの人のページをめくる音がやたらうるさかった。本番はいろいろなことが気になるけど、ちゃんと集中し切ることが大事だと思う。

大阪(文志望)

センター試験までの勉強を通して、はっきりとした目標をもつことが大切だと思えました。僕は10月まで明確な志望校が決まっておらず、ふわふわした状態でしたが、そんな自分に火をつけたのがオープン模範でした。模範の行き帰りを共にした同輩と様々な話を聞いて、「この大学に行きたい!」と思うようになりました。そこからは本当に集中して勉強に臨むことができました。12月からはほとんどの時間をセンター対策に割き、ひたすら過去問、予想問題を解きました。冬休みを無駄にせず、有効に使うことができたのも大きかったと思います。センターはあつという間にやってきました。正直前日、もつと言えど当日でさえあまり実感が湧かなかったような気がしますが、それにとても緊張して勉強してでもそんな時に頭をよぎったのは、一緒に頑張って勉強してきた仲間や支えてきてくださった先生方の顔です。この存在に強く勇気づけられました。それに何より自分を奮い立たせたのは「これだけやってきたんだ」という自信です。これはとても強い原動力となり、落ち着くことができました。そのおかげで過去の模範や特編での最高得点を大きく上回る点数を本番でとることができました。最後に力になるのは、やっぱり自分の努力なんだと感じました。

岐阜高校を巣立っていく皆さんへ

3年学年主任 高木 雅紀

卒業生の皆さん、そして卒業生の保護者の皆様、本日はご卒業おめでとうございます。

目を輝かせながら岐阜高校に入学してきてくださった日のことが、昨日のことのように思い出されます。入学当初は、速い授業進度や学習量の多さ、そして部活動との両立など、大変なこともあったと思いますが、一つ一つ乗り越えて、逞しく成長された皆さんが今日はこのほかに眩しく見えます。

林間学舎活動、岐阜祭の文化祭や体育大会、応援合戦、修学旅行等様々な行事、生徒会活動、部活動、「科学の甲子園」等の活躍等、多くのすばらしい足跡を残してくれました。この三年間を岐阜高校で、皆さんと一緒に過ごせたことを心から感謝したいと思います。本当にありがとう。

さて、三年間慣れ親しんだこの岐阜高校を巣立っていく皆さんに、どんな未来が待っているでしょうか。

「セレンディピティ」という言葉をご存知ですか。「偶然出会った幸運を見逃さない能力」という意味で、特に科学の分野でよく使われる言葉ですが、皆さんには、人生においてもそういった能力を身につけて欲しいと思います。この先「幸運」がゴロゴロと転がっているとは思えません。しかし、夢をもって生きること、

努力を惜しまないこと、感謝の気持ちで忘れないこと、自分に嘘をつかないこと、自分らしく生きること……。

昨年、ノーベル賞を受賞した赤崎勇先生が「あまり偉そうなことは言えないが、はよりの研究にこだわらず、自分のやりたいことをやるのがいちばんだ」と思う。自分のやりたいことなら、なかなか結果が出なくても続けることができると思う。」と言ってみえます。大学で、また社会に出て、自分のやりたいことが見つかるでしょうか。謙虚に、周りに流されず、壁にぶち当たっても、「百折不撓・自强不息」の精神で、進むべき道を見つけて欲しいと思います。

いずれ皆さんは社会に出て働くようになりますが、この岐阜高校で過ごした三年間を礎にして、社会で大きく羽ばたいてください。地元岐阜で活躍する人もいます。中には日本のリーダーとして、世界を相手に活躍する人もいます。と思います。そして、ちょっと疲れたときには、岐阜高校で過ごした三年間を思い出してください。きつと元気が出て、またがんばれると思いますよ。いつまでも、いつまでも、岐阜高校は、皆さんにとってそんな場所であると思います。

皆さんの抱いた大きな志が花開くことを楽しみにしています。

3年間の思い出



3 力 年 皆 勤 者 【 合 計 94 名 】	1組	河合 夢乃 長瀬 真依	黒田 希美 林 優宏	河村 慶一 松井 智子	杉山 加奈 渡辺 晶斗	田中 志於
	2組	亀山 千晶 中田 万裕	後藤 僚太 野々村裕翼	清水光一郎 廣瀬 将也	千原緋菜乃 藤井 駿	中島 拓紀
	3組	安藤枝里子 宮田 大輝	安藤 詩乃 森 奨詞	大矢 圭悟 安澤 晃	菊田はる菜 山田 諒	草野 侑嗣 山本 大慈
	4組	青木 要拓 土田 容史	浅井 詢吾 中川 裕貴	新木 啓 長谷部宏明	伊藤 泰生 服部 真由	佐村 雄斗 深沢 太一
	5組	足立 国大 笠置 歩	石垣 裕登 加藤 未桜	石原 昂将 小林 敬弘	井上 雄也 篠原 悠希	小川 涼穂 柴田 尚季
	6組	竹山 太貴 奥村美紗貴	堀江 優花 河村 英果	村山 由季 小島さやか	小西 里奈 小西 里奈	柴山 真純
	7組	土屋 綾香 青木 達也	原 一喜 伊藤 有以	二村 友子 江崎 泰志	矢橋 茉佑 片尾 洋輝	片桐 康太
	8組	澤田慎太郎 青山 僚汰	仙石 建斗 今尾 康太	西田 賢生 高島 志歩	宮本 果南 遠山 佳之	渡邊あきら 藤井 彩夏
	9組	青木 健悟 藤吉 美月	上田 真未 松名 美咲	大澤未哉子	坂口 昌志	篠田 有莉
	10組	井川 知子 櫻井 南奈	遠藤 奨太 杉山真奈美	奥村 尚也 坪内みなみ	神谷 有輝 内藤 里奈	阪井 那緒 洞田 琢己
10組	松原 周作	山田 真佑				

同 窓 会 幹 事	1組	樋口 諒・杉山 加奈	8組	今村光一郎・猪野間もも
	2組	富松 拓也・長谷川朋香	9組	青木 善哉・戸崎せんり
	3組	渡邊 雄太・奥田 朱音	10組	森井 裕貴・岡本 美波
	4組	鈴木 裕規・若原 歩花		
	5組	水野 嘉人・番匠 美春		
	6組	山田 智大・國江 咲帆		
	7組	高橋 風弥・宮本 果南		

学年代表幹事
高橋 風弥・戸崎せんり

平成27年度 大学合格者数

大学名	合格者数	大学名	合格者数	大学名	合格者数
北海道大	1	神戸市外大	1	豊田工大	9
東北大	3	奈良県立大	1	名古屋外大	8
山形大	1	県立広島大	1	名古屋女子大	2
筑波大	5	自治医大	1	南山大	104
千葉大	2	千葉工大	1	藤田保健衛生大	9
お茶の水女子大	5	青山学院大	13	名城大	67
東京大	12	学習院大	2	日赤豊田看護大	3
東京医歯大	1	北里大	3	長浜バイオ大	6
東京外大	2	慶応大	35	京都産業大	2
一橋大	2	国学院大	1	京都女子大	5
横浜国立大	5	国際基督教大	1	京都薬大	5
富山大	3	駒澤大	2	同志社大	104
金沢大	5	芝浦工大	5	同志社女子大	5
福井大	3	上智大	7	立命館大	93
信州大	3	中央大	25	関西大	7
岐阜大	67	帝京大	1	近畿大	6
静岡大	6	東海大	6	関西学院大	6
浜松医大	1	東京女子大	2	兵庫医大	2
愛知教育大	1	東京電機大	1	武庫川女子大	1
名古屋大	44	東京農大	5	久留米大	1
名古屋工大	14	東京薬大	2	防衛大学校	2
三重大	3	東京理大	72	岐阜市立女短	4
滋賀大	1	日本大	5	岐阜保健短	1
京都大	15	日本女子大	3	平成医療短	1
京都工芸繊維大	1	法政大	6		
大阪大	21	東京都市大	1		
神戸大	8	明治大	50		
奈良女子大	1	明治学院大	2		
鳥取大	2	立教大	9		
島根大	1	早稲田大	41		
広島大	2	麻布大	1		
徳島大	1	横浜薬大	2		
愛媛大	1	金沢医大	1		
高知大	2	金沢工大	2		
九州大	3	朝日大	2		
国際教養大	3	岐阜聖徳学園大	9		
前橋工科大	1	岐阜医療科学大	7		
横浜市立大	2	愛知大	9		
岐阜県立看護大	1	愛知医大	10		
岐阜薬大	5	愛知学院大	5		
静岡県立大	1	愛知工業大	1		
名古屋市立大	10	愛知淑徳大	4		
滋賀県立大	2	金城学院大	8		
大阪市立大	1	椋山女学園大	1		
大阪府立大	8	中京大	16		
兵庫県立大	1	中部大	8		

※浪人生を含む

平成27年度 同窓会総会運営委員会 名簿

委員長	本田 勝(昭和47年)			
副委員長	大平 高司(昭和47年)	松岡 正人(昭和57年)	土田 豊(平成4年)	
事務局	鬼頭 明彦(昭和47年)			
総務部	大平 高司(昭和47年)※	高橋 智恵子(昭和47年)	大原 信子(昭和47年)	大野 智子(昭和47年)
	太田 秀之(昭和47年)	玉田 佐知子(昭和47年)	矢本 哲也(昭和57年)	梶山 記久子(昭和57年)
	武藤 玲央奈(平成4年)	鈴木 真美(平成4年)		
財務部	名和 博(昭和47年)	玉田 佐知子(昭和47年)※		
	長尾 光倫(昭和57年)	永田 陽子(昭和57年)	和田 百合(昭和57年)	
	川瀬 友亜(平成4年)※	武藤 玲央奈(平成4年)※	新見 拓也(平成4年)	
監査	大道寺 圭子(昭和47年)	後藤 篤志(平成4年)		
会報部	折戸 広昭(昭和47年)	篠田 紳司(昭和47年)	大原 信子(昭和47年)※	高橋 比佐子(昭和47年)
	樋口 博久(昭和57年)	鈴木 誠(昭和57年)	青木 智英(昭和57年)	
	川瀬 友亜(平成4年)	田中 恒嗣(平成4年)	横井 聡(平成4年)	
広告部	足立 典朗(昭和47年)	東 治夫(昭和47年)	中山 理(昭和47年)	山賀 寛(昭和47年)
	水野 富夫(昭和47年)	広瀬 功(昭和47年)	高木 宣雄(昭和47年)	石山 俊次(昭和47年)
	小木曾 啓子(昭和47年)	杉山 恵一(昭和47年)		
	川瀬 幸彦(昭和57年)	山田 秀夫(昭和57年)	臼井 智浩(昭和57年)	操 良(昭和57年)
	若園 明裕(昭和57年)	谷上 文祥(昭和57年)	松野 功(昭和57年)	西脇 功(昭和57年)
	戸田 真由美(昭和57年)	田中 久美子(昭和57年)		
	村瀬 範晃(平成4年)	安藤 量基(平成4年)	御宿 朋宏(平成4年)	吉村 光太郎(平成4年)
	北村 美穂(平成4年)	間野 佐知子(平成4年)	桑原 賢典(平成4年)	塩谷 俊昭(平成4年)
小島 隆之介(平成4年)	福田 由美(平成4年)			
会場部	太田 秀之(昭和47年)※	竹中 浩(昭和47年)	嶋 浩二(昭和47年)	山下 修(昭和47年)
	坪内 朱美(昭和47年)	松浦 陽司(昭和47年)	沼澤 真理子(昭和47年)	
	江崎 浩志(昭和57年)	三神 淳子(昭和57年)	安田 亜紀子(昭和57年)	斉藤 寿子(昭和57年)
	鷺主 玲子(昭和57年)	広瀬 祐子(昭和57年)	棚橋 好子(昭和57年)	山田 由郁里(昭和57年)
	久保田 順子(昭和57年)	服部 美由貴(昭和57年)	井深 啓子(昭和57年)	菅沼 清美(昭和57年)
	野田 裕子(昭和57年)	加藤 哉門(平成4年)	澤田 尚子(平成4年)	堀 伸輔(平成4年)
	高橋 正章(平成4年)	安藤 宏(平成4年)		
動員部	今尾 雄一(昭和47年)	今村 徹志(昭和47年)	高橋 智恵子(昭和47年)※	河合 正明(昭和47年)
	山田 貞夫(昭和47年)	羽田野 正史(昭和47年)	大野 智子(昭和47年)※	木村 雅子(昭和47年)
	嶋 浩二(昭和47年)	丹間 泰郎(昭和47年)	立川 公一(昭和47年)	村瀬 賢一(昭和47年)
	伊吹 典高(昭和47年)	平川 和宏(昭和47年)	葛西 淳(昭和47年)	小柳 育子(昭和47年)
	高間 素代(昭和47年)	天野 利彦(昭和47年)	兼松 春美(昭和47年)	末次 三郎(昭和47年)
	宇野 吉浩(昭和57年)	石田 達也(昭和57年)	青木 智英(昭和57年)	平光 薫(昭和57年)
	畑中 由美子(昭和57年)	近藤 かよ子(昭和57年)	野田 伸朗(昭和57年)	西脇 功(昭和57年)
	細川 隆(昭和57年)	玉護 真理子(昭和57年)	大中 和昭(昭和57年)	
	田口 順司(平成4年)	鈴木 亨(平成4年)	松尾 和彦(平成4年)	五島 聡(平成4年)
	初音 俊樹(平成4年)	浦 珠美(平成4年)	早川 佳穂(平成4年)	澤田 昌久(平成4年)
	垣内 優子(平成4年)	玉木 孝佳(平成4年)	折居 麻祐美(平成4年)	近藤 宗由(平成4年)
	小田切 清子(平成4年)	川瀬 隆男(平成4年)	柳場 康成(平成4年)	小川 慎司(平成4年)
	柴田 酉嘉(平成4年)	寺嶋 浩高(平成4年)	和座 雅浩(平成4年)	近藤 登紀子(平成4年)
在京動員部	森 大吾(昭和47年)	小林 益子(昭和47年)	秋田 政数(昭和47年)	滝 充(昭和47年)
	西野 信(昭和47年)			
	水崎 幸一(昭和57年)	桐山 勉(昭和57年)	奥田 修(昭和57年)	中村 健二(昭和57年)
	榮 麻希(平成4年)	新見 拓也(平成4年)※	桑原 賢典(平成4年)※	堀 哲弥(平成4年)
愛知動員部	井川 誠(昭和47年)	高間 素代(昭和47年)	柘植 奈保美(昭和47年)	

広告ご協賛及び協賛金の御礼

平成27年度岐阜高等学校同窓会総会の開催に伴う会報の発行に際し、広告のご協賛及び協賛金を賜りました皆様に厚く御礼を申し上げます。

なお、ご紹介順序は会報の構成上原則的に順不同となっております。何卒ご了解くださいます様よろしくお願い申し上げます。

平成27年6月14日

岐阜県立岐阜高等学校同窓会
平成27年度総会運営委員会
運営委員長 本田 勝

今年も、平成27年度同窓会会報誌を同窓生の皆様にお届けします。会報誌の編集にあたっては、巻頭の挨拶をお寄せいただいた方々、恩師や同窓生、母校の事務局の皆様にも多大なご協力、ご支援をいただきました。厚く、御礼を申し上げます。

さて、今年度は、時代の変化に即した運営を考えていくという観点から同窓会運営委員会の各部において、経費の削減が課題の一つとなりました。会報部においても、印刷方法、デザイン料、印刷会社等について協議を重ねてきました。

しかし、今まで立派に編集されてきた会報誌のレベルを落とすことはできません。同窓生に読んでいただける会報誌を目指すとともに、経費の削減という課題を抱えながら構成や内容を、出来るかぎり編集委員が企画するという方針を立てて会報誌の作成を行いました。自分たちの手でという方針を取ったために、構成等で不備な点はあると思いますが、ご容赦をお願いいたします。

特集につきましては、岐阜高校の140余年の歴史を絶やさず、「過去から未来へ、絆をつなぐ」をテーマとして企画しました。

特集1は「岐阜高生が語る未来」です。過去に思いをはせるだけでなく、現在の岐阜高生が考えていることを知りたいというご意見が多くあり、現役の高校生に現在、未来を熱く語っていただきました。この座談会に参加してくださった4人の岐阜高校の生徒の皆さんに感謝するとともに、「座談会」にご理解、ご協力いただいた岐阜高校の丹羽章校長先生並びに職員の皆様に感謝を申し上げます。

特集2「未来へのメッセージ」では、経済・宇宙・医学・スポーツ・教育等の第二線で活躍されている方に、最先端の状況や未来への展望を寄稿していただきました。「リニア中央新幹線が拓く未来」、「オリンピックへの夢」をはじめとして、魅力的な記事にあふれるページとなりました。

また、恒例の「同窓生エッセイ」では、昭和47年、57年、平成4年の同窓生の皆様には、ご無理を言っ、過去の思い出、現在の状況等をご寄稿していただきました。高校時代の思い出を胸に、人生を謳歌し、前向きに生きておられる同窓生の方々の様子がうかがえました。

会報編集は、昭和47年卒、57年卒、平成4年卒の委員が担当しました。多くの寄稿者の方々とのやり取りでは、貴重なお時間を割いていただきありがとうございます。ありがとうございました。

最後になりましたが、母校の益々の発展と、同窓生各位のご健勝とご多幸をお祈りして、結びの言葉といたします。

同窓会総会運営委員会 会報部一同

平成27年度
岐阜県立岐阜高等学校同窓会総会

会報

■ 発行

平成27年6月14日

■ 編集

岐阜県立岐阜高等学校同窓会
平成27年度総会運営委員会

■ 印刷

竹田印刷株式会社

応援団々歌

- 一、金華城頭月冴えて
蓋世の英雄信長の
万象すべて沈黙なり
雄凶の跡に苔むしぬ
- 二、嗚呼熱血児信長の
ありし昔を偲びては
霸業は夢と消え果てど
健児無量の想ひあり
- 三、熱血受けし一千の
桜の香り身に沁みて
心一つの健児等が
根城構えて百三十余年
- 四、悲壯の風の吹き荒び
校の徽章の桜花
混濁の波逆巻けど
身もて護る健児団
- 五、熱血なる敵の迫るとも
破邪の剣をぬき立てば
寄せ来る仇は多くとも
竜車に向う螳螂ぞ
- 六、敵に鬼神の勇あるも
我には紅き血潮あり
仇に天魔の計るるも
カラくれなるを見ずや君
- 七、さはあれ心せ同胞の
桜の花の散るあらば
香りは永き百三十余年
散るその下に死なん哉
- 八、誘う嵐に散らされず
朝日に匂ふ桜花
尽くせし心の現はれて
その花の下に我れ立たん

凱旋歌

- 一、泰山厲と消ゆるとも
誓って桑梓に見えじと
我が身に功なかりせば
出でし華陽の健男児
- 二、されど見よ見よ今はこれ
姿を変えて悠々と
我が大丈夫は帰り来ぬ
身に大功の光そへ